
ゼロの亀ちゃん

栗林

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの亀ちゃん

【Nコード】

N0230I

【作者名】

栗林

【あらすじ】

壮絶な戦いから5年、カメハウスで平和に暮らしていた亀仙人がルイズに召喚され…

第一話 亀とルイズ（前書き）

ある日、ドラゴンボールの原作を読んでいたら

「亀仙人をハルケギニアにぶっ飛ばしたら面白いのでは？」と思い
実行に移りました。反省はしていません。

さてスケベじいさんはここでどう生きて行くのでしょうか？

第一話 亀とルイズ

第23回天下一武道会の決勝戦。地球の運命を決める激戦となった悟空vsピッコロ戦から5年が経ったある日、今日は久々に悟空一家やブルマ達と出会う事になる日であった。

どっかの大海原の小島にある一軒の住宅。

そこから今日も1人の老人がエッチな本を見てやらしい笑い声をあげていた。

「ホホ…おおすごい！！」

「これクリリン！…ちよつとこんかい！！こいつはすごいぞ！！」
老人に呼ばれたクリリンという男は亀仙人の弟子で悟空と同期であり実力は悟空には劣るもののあのピッコロがある程度強さを評価するほどの実力がある。

また技も多く、ヤムチャより強いという噂である。

「まったく武天老師様は、いっつもスケベな本ばかり」

「な、お主だって弟子入りの際えつちな本でワシを釣ったではないか！」

「あ、あれは血の迷いっていうか…あれですよあれ！」

「ほほう」

亀仙人のサングラスが不気味に光る。

「…しかし武天老師、今日は天気が悪いですね」

ウミガメがそう言う。

たしかに今日は天気が悪く波も少々荒い。
風も強くなってきた。

「わしゃ知らんよ、自然には勝てんからのお」

その時、天から落ちてきた雷が亀仙人を直撃した！

「あぎやああぎやあああ！！！！」

亀仙人の禿頭が夜戦で使われるような照明弾の如く輝き、そのまばゆい閃光は太陽拳に匹敵するものがあつた。クリリンもウミガメも一時的に視界を失う。

：

：

：
クリリン達の目が見え始めた頃には、亀仙人の姿はなかった。

んで、亀仙人は

「あんた誰？」

目をあげると、背は高いとはいえず貧乳でロリっぽいがやたら高貴そうな女の子がいた。

皆さんご存知ルイズである。

「ワシか？ワシは昔天下の武天老師と謳われたただのおじいさんじ

や
」

亀仙人はなんにも考えていない、とりあえず適当な自己紹介をするのだった。

「…どこの平民？」

ルイズは半ば呆れながらもはや定番であるこの質問をした。

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民呼び出してどうするの？」

「ちょ、ちよつと間違っただけよ！」

「間違いつて、ルイズはいつつもそうじゃん」

「さすがはゼロのルイズだ！」

呼び出されたのが才人じゃないだけでここまでは原作どおりだ。

「ミスタ・コルベール！」

禿が多いドラゴンボール世界でも十分通用するほどのハゲであるコルベールも登場。

本当に呼び出されたのが亀仙人だつて事意外は原作どおりであった。
「取り敢えず契約を結ぶべきはその老人のようだ。人間の使い魔と
いうのは前例はないが、一度やったら後戻りは出来ない。ミス・ヴ
アリエール、その老人と使い魔の契約を結びたまえ。」

「うつ…」

ルイズにとって亀仙人を使い魔にするのは屈辱的であった。

こんな介護が必要そうな老人を使い魔にしたところでなんにも役に
立たない上に介護に疲れてこっちがこの若さで婆になってしまふの
ではないかと思うほどだった。

「あんた、感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普
通は一生ないんだから」

恥ずかしそうに、そして嫌そうにルイズはそういう。

「はて？なにをするんじゃ？」

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

そう言うところルイズの顔が近づき、そしてルイズと亀仙人の唇が重なった。

皆様が想像したくない景色の一つであろう。

「ほう、ワシにキスしてくるとは大胆な娘じゃのお……じゃがワシは生憎おっぱいがちっちゃい子には興味がないんじゃ」

「なっ!？」

ルイズ250kg爆弾たるものに火をつける一言であった。

「この……ドスケベジジイ……!」

「あづうううう……!……!」

ルイズはわざとルーンを強く刻んだ。

その痛みは天津飯に後頭部を蹴られるより痛い。

その後

「あんたなんなのよ!」

「まあまあ、そう怒ることはなからう」

「怒るに決まってるじゃないの!人の胸にケチつけて!」

「だってちっちゃいんだもん」

亀仙人はいつもの能天気な感じでそういうがルイズ原子爆弾たるものの信管を作動させてしまうにすぎなかった。

「そうなのね…デカいお乳が好きなのね…このエロジジイ!!」

ルイズは亀仙人のつるつるな頭を連続で叩きまくった。

バキィ! ドカァ! スコーン!

「いったあああああ!!」

亀仙人は泣き叫ぶような悲鳴をあげた。

「ひどいや、年寄りはいたわらんかい…」

「あんた元氣そうじゃないの」

「それとなんであんたが私に召喚されたのよ」

「そんなこといわれても、ワシは平和にえっち本を觀賞していたら雷にあたって気がついたらここにいてんじゃ」

「あんた…って…きつとバチがあたつたのよ…」

ルイズはあきれ果てていた、ため息すら吐いていた。

「でもなんであんたが召喚されたのかしら？」

「ワシが知るか、それと出来れば…武天老師が亀仙人って呼んでもらえんかのぉ？」

「…と…とりあえず亀仙人、どこから来たの？」

「カメハウスじゃ」

「は？」

聞いた事もない場所だった。

ハルケギニアの地図にはそんな地名は記載されていない。

いろいろと話しているうちに亀仙人は異世界から来た事が判明した。

「ところでワシは？お主の使い魔としてなにをすればいいんじゃ？」

「いいわ。教えてあげる。まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力が与えられるわ」

「今、見えてる？」

「あんたじゃ無理見たいね。わたし、何にも見えないもん！」

「ワシには見える…お主、今日は白いブラをつけているな」

「なっ！」

亀仙人の適当な下着予想だがこれはルイズ水素爆弾の信管を作動させるだけだった。

「変態ドスケベ下品糞ジジイ！！」

「こりゃ！やめんか！鉄パイプは流石にやばい！ぎゃあああああ！！！！！！」

当然の如く亀仙人はフルボッコにされるのであった。

（…たく、なんでこいつ今日の私の下着の色がわかるのよ…）

亀仙人の下着予想は正解だった。

今日のルイズは白である。

「それで、あとはなんかあるのか？」

ボロボロの亀仙人はルイズに質問した。

「そうね、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば秘薬とかね」

「秘薬とはなんじゃ？」

「特定の魔法を使うときに使用する触媒よ。硫黄とか、コケとか…

…」

「そこらを歩き回れば手にはいるものばかりじゃな」

「だからそれを使い魔がとってくるの」

「まあいいわ。じゃあ次、これが一番なんだけど……、使い魔は、主人を守る存在であるのよ！その能力で、主人を敵から守るのが一番の役目！でも、あんたじゃ無理ね……」

「ワシ…これでも昔は天下の武天老師と謳われつつた存在じゃが…」

「なにそれ？でも今はただのスケベおじいさんでしょ？」

武天老師という肩書きからして恐らく昔は強かったのだろぅと思つたルイズだがそれはあくまで平民のレベルでメイジからしてみれば雑魚同然でありしかも今はただの老人であるから結論使えないとルイズは思つた。

「だからあんたにも出来そうなことをやらせてあげる。洗濯。掃除。その他雑用」

「なんじゃ、やりなれとるわい、ひと昔前までは1人暮らししていたからの」

「喋つたら、眠くなつちやつたわ…」

「ワシはどこで寝ればいいんじゃない？」

ルイズは床に指を指した。

「老人を布団もしいてない床で寝かす気か？」

「くぅ…」

ルイズは仕方なく、毛布を亀仙人に差し出した。

そしてルイズは着替えだした。

「おおお！！これがプリティギャルだったら…ワシ幸せ！」

（い…いつか殺すこのジジイ！）
こうして、名門貴族の三女で16歳の少女と、かつて武術の達人として知られていた老人の生活が始まった。

第一話 亀とルイズ（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしております。

連載が4作に…でもやってみたかったのでさっさとタルブ戦に持つてこうと…最後までがんばります。

第二話 老兵だというのに絶好調の亀

＊翌日＊

「ふう…おいクリリン！飯はまだか！？」

亀仙人がそう叫ぶと、声がうるさかったのかルイズは目を覚ました。とても眠そうである。

「うう…うるさいわねえ」

「…あんた誰？」

「ん？なんじゃお主は？」

お互い昨日の事をすっかりわすれていたようだが亀仙人の頭が先に昨日の事を思い出した。

「…そうじゃお主はワシのご主人様だかなんだかだったな」

「…そういえば。昨日、召喚したんだっけ？」

「…ってかクリリンって誰よ？」

「ワシの弟子じゃ、こんぐらいの背でハゲ頭で鼻がない奴じゃ」

「…どんな化け物よ…」

ルイズはさらに呆れた。

ちなみにクリリンの事を化け物といったのはほかにヤジロベーがいる。

「…あ、そうだ。洗濯しといて…私はもう一眠り…」

そういつてルイズは再びベットに倒れこんだ。

「まったく近頃の若もんはしょうがないのお」

そういう愚痴はいうが逆らうとなく怖い（昨日のおしおき）ので亀仙人は洗濯をするべく外に出た。

「洗濯機はないのか、まあ体を動かす事は健康にはよいからのお」

亀仙人には一緒にハルケギニアに飛ばされてきたアイテムがあった。
えっちな本×1（ルイズにバレたらヤバイので隠した）

武道着×2（一つは黒、ピッコロ大魔王に魔封波を放った時のあれ。
もう一つは上オレンジ下青、初期によく着ていたやつ…ということ
で以下初期バージョン）

下着×2

緑のシャツと短パン×1

原作でランチとかに着せたあのワイセツな胴着（…というより下着）
×3

ちなみに以下は亀仙人の能力

声優：宮内幸平↓死んじゃったけどこの人しか思いつかない！脳内
再生で

戦闘力：139↓マツチヨになると???（山をぶつ飛ばしたり月
を消す威力 原作より）

かめはめ波↓マツチヨになると山や月を消し飛ばせる。

残像拳↓わりと使える。

酔拳↓使用されるといろいろとめんどくさい

よいこ眠眠拳↓ただし悟空には通じないことが原作で判明
ブルマのおかげ

萬国驚天掌↓威力は高いが大猿には効かない。

金縛りの術↓男狼に使用した。

魔封波↓天津飯レベルの強さになると大丈夫だが亀仙人は使用する
と絶命してしまう。

空は飛べない

亀仙人は洗濯前に朝の体操でもするかと着替えた。

今日は初期バージョンである。

袖をまくり、腕に力をいれる。

「ふん！」

さすがは武術の達人というだけあっておいても動きにはきれがある
かつ敏捷性が高い。

「あの、なにをされているんですか？」

「へ？」

後ろを振り向くと黒髪のメイドさんがいた。

亀仙人好みの体系で顔もかわいい。

「ほおおおおお！！！！！！！！！！」

そのとき、亀仙人の手が彼女、シエスタの胸へ…

「ちよつと失礼します…ぐふふ…」

「…！！」

スパーン！ドスーン！メキメキメキイ！！！！

流石に危機感を感じたのかシエスタは亀仙人をボコボコにした。

「あ、すみません！」

必死に謝るシエスタだが亀仙人はおきあがろうとしない。

「いたた…年寄りを少しはいたわらんかい」

「だっておじいさん急に触ろうとするんですもの」

「ところでなにをされていたのですか？」

「朝の体操じゃ、それから洗濯をする所じつやた」

「ずいぶん本格的な体操ですね」

「なんたつて亀仙流じゃからのぉ！」

「え？おじいさん強いんですか？」

「まあワシこうみえても武術の神といわれつつたが、昔はな」

「世界一と言われた時代が懐かしいわい」

この時すでに悟空やピッコロはもちろん、クリリンやヤムチャにも実力を抜かされていた。

もちろん師匠としては嬉しい事だが同時に己の無力さを悔やんでいた。

ただしエロスな事に関しては悟空達よりも若いと思っていた。

「そうだ！お主も武術をやらんか？」

その時、自分の所有物を思い出し、なにやらいやらしい事を考えた。

「え？私なんかただ…」

「いやいや、なにも本格的にやってみなさいというわけではない。

ほんの軽い気持ちでよいのじゃ」

「心身の健康の為、また美容のためにも決して無駄にはならんぞい」
ランチを勧誘したさいと同じ方法である。

シエスタはまんまと釣られてしまった。

「そうなんですか？じゃあやってみようかな…」

「そうかい！じゃあ早速このユニフォームに着替えなさい」

「あ、はい」

数分後

「あの…これ下着みたいなんですけど？」

「ええのー！ええのええのー！！！」

「えっ！？」

亀仙人は鼻血をたらしながらそう叫んだ。

そして…

「ワクワクするぜハイハイ!!」

年寄りなのにそんな感じで踊り始めた。

「…」

啞然とその様子をみるシエスタ。流石にまずいと思った亀仙人は急に真面目になった。

「実は、それが我が亀仙流の正式なユニフォームなのじゃ」

そついうとシエスタはギャグ漫画でよくあるような転び方をした。

「うそお!!」

「嘘じゃないよ」

もちろん嘘です。

「では…早速稽古にかかるぞ!!」

(若い娘はええのお…)

不純な事を考えつつ…

「まずは、基礎体力を身につけなければならん」

「その基礎体力を身につけるにあたってもっとも重要な事は子作…」

その時ルイズの膝が亀仙人の後頭部を直撃した。

「なにをたんらんでるのよあんたは!!!!!!!!!!」

バキィ!!

「ひぎい!!」

亀仙人は気絶した。

「ごめんなさい、うちの使い魔が」

「あら、ミス・ヴァリエールの使い魔がこのお方だったのですね」

「…あ、こいつ洗濯したかしら?」

「それなら私がやっておきます。このお爺さん気絶してるみたいで

すし」

「一応亀仙人って名前があるわ、まあどうでもいいけど」
「お願いね」

「はい」

そういつてシエスタはかごをもってどこかへ行った。
その時亀仙人が目を見ました。

「あいたた…相変わらずお主は人の扱いが乱暴じゃのお…」

「あんたが人にセクハラしようとするからでしょ、ホント目をはなせないわ…」

その後2人は部屋に戻り、亀仙人はルイズを着替えさせようとした。
（もつと大人だったらワシうれしいのに…）

だがルイズは亀仙人が変態と知ると部屋から出て行くように指示した。

三分ほど待ち、ルイズがでてくると赤い髪のお姉さんがやってきた。

「はあゝい！」

亀仙人はとりあえずそう呼びかけ、外を見て後の言葉を考えた。

「今日はとってもグッドなお天気ですね！」

「なに？このジジイ」

「おはようキュルケ」

「おはようルイズ、あんたの使い魔ってそいつ？」

「そうよ」

「あつはっは！ファンキーなお爺さんじゃない！」

キウルケは半分ルイズを馬鹿にするような感じで笑いながらそういつた。

「どうも」

亀仙人はギャルと出会ったときのあのいやらしい表情でそういつた。
「どうせ使い魔にするなら、こついうのがいいわよねえ」。フレイム」

その時、得体の知れないものがでてきた。

「火トカゲのサラマンドーよ。見て？この尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違なく火竜山脈のサラマンドーよ？ブランドものよ」。好事家に見せたら値段なんかつかないわよ？」

「そうじゃのお、いい尻よのお」

そついつて亀仙人はキウルケの尻を触つた。

「あらお爺さん？お年のわりに元気なのねえ？」

「こんのジジイ！」

ルイズはたまたま持っていたハリセンで亀仙人を思いつきりぶつた。
スパーン！

「ひでぶ！」

亀仙人はどこか遠くへとんでいつてしまった。

しばらくして・

「あなたのお名前は？」

「ワシか？ワシは亀仙人じゃ」

「かわつた名前ね。それじゃあお先に失礼」

キウルケは去つた、だがルイズは怒つていた。

「くやしー！なんなのあの女！自分が火竜山脈のサラマンドーを召

喚したからって！ああもう！」

「まあまあ、ええじゃないか。あの娘はええぞ、上はボインで下もよさそうじゃ」

「みさかえ無しに人の尻を触るな！」

ルイズは亀仙人をぶん殴った。

バキィ！

「…いたた…じゃがだいぶなれたぞい」

その後食事を終え厨房に食器を返しにいった。

その後、たまたま風竜と出会った。

「なんじゃこいつは？こいつのは悟空のほうが詳しそうじゃの」

「きゅいきゅい」

「誰？」

声をかけられたので後ろを見ると、とても小柄な女の子がいた。青い髪の毛である。

「ワシか？ワシは亀仙人じゃお主は誰じゃ？」

「タバサ」

（タバサか、うゝん、お乳が足りんな、もっとボインとしていないとな）

某戦略ゲーのドイツ総統ヒ。ラー以上のおっぱい星人である亀仙人は目の前にいる少女の胸では全然足りない。

「ところでタバサとやら、こいつはなんじゃ？」

「シルフィード」

「そうかシルフィードか、よい竜じゃな」

「竜、知ってるの?」

「まあ山にいけばいくらでもおるだろう」

パオズ山にいけば竜っぽいのはいくらでもいる。

その山に住む悟飯という弟子がいた亀仙人ならそのへんはよく知っている。

（悟飯で大猿化した悟空に踏み潰され死亡、なお孫に同姓同名がいる、つまり悟空の息子。こちらのほうが爺さん悟飯よりも有名である）

「早く戻った方がいい」

「なんでじゃ?」

「ルイズが探してる」

「そうか、じゃあワシは帰るとするわい」

亀仙人はそういつてその場を去った。

「シルフィード」

「なんなのね?お姉さま?」

「彼は何者?」

「とっても優しいくてスケベな人なのね。けど、何だかすごく不思議な人だったのね」

「そう」

タバサは亀仙人が向かったほうを見ていた。

しかしスケベな爺さんにとってトリスティン魔法学院は夢のような

場所だった。

さて亀仙人はこの物語が終わるまでに何回おしおきにあつたのでしょうか？

その回数は才人より多そうです。

第二話 老兵だというのに絶好調の亀（後書き）

ご意見、ご感想などお持ちしております。

今思いましたけど月破壊できるほどの強さを持つ亀仙人にガンダールヴって意味あるんでしょうか（笑）

第三話 いきなり決闘！？武天老師vsギーシュ

授業中

「ワシはいつまでここにいればいいんだ？」

「授業が終わるまでよ」

亀仙人は退屈な授業に飽き飽きしていた。

そもそも魔法みたいなのを使える奴なんて自分の回りに沢山いるから不思議でもなんでもなかった。

なによりこの中に老人がいること自体、シュールであった。

：

：

：

しばらくたって昼食の時間である。

なおここまでするのに亀仙人は三回ルイズにおきされている。

スタイル抜群の女性に対して胸や尻を触るなどのセクハラ行為が原因である。

さて、事件は丁度この時だ。

回想

「確か、あのゼロのルイズが呼び出した平民だったな。よかつう。

君に礼儀を教えてやろう。ちょうどいい腹ごなしだ」

「ワシはそんな暇じゃないんだ、すまんのお」

「ヴェストリの広場で待っている。準備ができたなら、来たまえ」

「やれやれしょうがないのお」

ギーシュがまたをかけている事を知った亀仙人は突如ギーシュに喧嘩を売られたのであった。

「あ、あなた、殺されちゃう……。貴族を本気で怒らせたら……」
そういつてシエスタはどこかへ走っていった。

「あんた！何してんのよ！見てたわよ！なに勝手に決闘なんか約束してんのよ！」

「そんなこといわれても決闘を申し込んだのは相手じゃろ」

「あんた本当に死ぬよ？あれでもギーシュは土系統のドットメイジなのよ！あんたみたいな自称武術の達人の平民が勝てるわけないわ！」

たしかに見た目だけならギーシュの勝ちに決まっていた。

若いのもギーシュである。

だがハルケギニアの人々は亀仙人の実力を知らない。

DB本編では激しい戦闘力のインフレについていけずコメディー的なキャラに成り下がってしまった彼だがクリリン、ヤムチャはもちろん一度悟空を破り自ら試合を放棄したとはいえ後に悟空に勝利する天津飯を相手にも引けをとらぬ戦いを展開した男である。

（最もあのまま戦っていても負けていたと亀仙人は思っている）

現実

んで、亀仙人は今ヴェストリの広場の広場にむかっていた。
今の服装は朝着ていた初期バージョンである。

亀の甲羅を背負っていないため体は軽い。
体調の万全でいつでも戦闘が可能である状態だ。

広場にはギーシュが相変わらずのキザったらしい動作をしている。

「逃げないで来た事だけはほめてあげよう、だけど実力はどうか
？」

「ギーシュ！相手は老人だから手加減してやれよ！」

「殺しちゃダメよ！」

生徒も相手がヨボヨボの老人だと知っているからギーシュに手加減
するよう呼びかけていた。

その時、ギーシュが薔薇を振り、花びらが一枚宙を舞いその中に甲
冑を着た女戦士が現れた。

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。教えてやろう。僕の二つ名は
「青銅」のギーシュだ。従って、青銅のゴーレム「ワルキューレ」
がお相手する」

「ええ…自分が戦わんとはなんと情けない」

亀仙人は悟った。この男なら簡単に勝てると。

その時、ワルキューレが亀仙人目掛けて走ってきた。

シユタタタ…

常人から見ればかなり早い、戦闘力は初期の悟空以下クリリン以
上である。

「！！」

亀仙人は攻撃が来た瞬間にジャンプし、そのまま地面に向かって落
下するように、だが足を出していた。

「ほい！」

ドガア！

足はワルキューレの頭にあたり、ワルキューレは崩れ去った。
シュタツ

「…終わったの？」

「へ？」

ギーシュは目を丸くした。

それまでこんなあっさりワルキューレを撃破した者はいなかった。

「おおー！」

生徒達も驚いていた。

（あ…あいつあんなに強かったの？）

ルイズもそう思っていた。

一方コルベールはオスマンに報告していた。

亀仙人に刻まれたルーノを正体が『ガンダールヴ』だったという事を。

しかし亀仙人ほどの達人にガンダールヴを持つ意味があるのだろうか？

（零戦とかティーゲルが未登場になる可能性大）

さらに決闘の事も話し合われた。

ギーシュと使い魔（亀仙人）があがった。その戦いの様子を見るべくオスマンは杖を振り壁にかかった大きな鏡に広場の様子を映し出した。

「ちくしょう！」

ギーシュは同じくワルキューレを出現させた。今度は7体である。

「さあ、降伏するなら今のうちだ！」

「しなかったらどうなるんじゃ？」

「もちろん！ワルキューレの餌となってもらう！」

「きゃー！！お爺さんが死んじやうわ！」

「やめて！お爺さんまいったって言って！」

生徒達は真剣になつて亀仙人に降伏をすすめた。

普通の人間ならこんな大勢のワルキューレと戦えない。

亀仙人が常人より強い事は判明したが、彼は戦闘力139、鶴や桃よりも強い戦闘力を誇る。

しかも今よりも体が鈍っていた第21回天下一武道回時でも4時間ぐらい戦える人間離れしたスタミナを持っている。とても老人とは思えない身体能力をもっている。

「じゃ、戦っちゃおーかな？」

「なに！？」

その時、亀仙人の前に迫った一体のワルキューレの所に素早く接近し強烈な鉄拳をあたえた。

「ほい！」

ドブツ！！

さらにその後ジャンプし目にはいったもう一体のワルキューレの顔面に膝蹴りをした後近くにいたもう一体のワルキューレの顔面を蹴った。

「ほいさっさ！」

シュタツ！

あっという間に三体が倒されてしまい亀仙人は次なる目標に向かつてダッシュ。

ゴッ！ ズン！

右足で蹴り左肘で打ち、さらにくるくる回りながら飛び上がりもう一体のワルキューレの頭に肘で攻撃！

ドゴッ！

着地した瞬間ワルキューレが右の拳で亀仙人を攻撃しようとした。パシッ！

「！！！」

バカッ！！

だが亀仙人は右手でその攻撃を阻止し左手で裏拳打ちをした。さらに亀仙人はジャンプし両手をグーでつなぎギーシュの頭をぶん殴ろうとした。

「ま…まてえええ！！！」

ドゴンッ！！

「か…かぺぺ…」

ギーシュは広場に伸びる、ただの負傷者となった。顔はアホにみえる表情だった。

「安心せい、ワシは殺しはせんよ」

「…すげえ！！！」

「かつこいいな！！！！！！！」

「ギーシュがあんなにあつさり負けるとは思わなかったぜ！」
ギヤラリーの生徒たちから歓声が聞こえる。

「もしかして…あいつって本当に武術の達人だったの…？」
ルイズも亀仙人を見直したようである。

並大抵の貴族メイジ以上の実力を持っていることを見抜いた。その後亀仙人はこの場を去った。

「ふう…久々に運動したから疲れたわい」

とはいうものの亀仙人は非常にピンピンしていた。

第三話 いきなり決闘！？武天老師VSギーシュ（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしております。

第四話 新たなる敵

『遠見の鏡』で亀仙人とギーシュの決闘の一部始終を見ていたオスマン校長は唸った。

その隣では同じく決闘を見ていたコルベールが啞然としていた。

「ガンダールヴ…は使つてなさそうですね…しかしドットクラスとはいえギーシュはメイジです。そのギーシュを武器もなにも使わずあつさり平民の老人が倒してしまうとは」

コルベールは震えていた。あの動きはメイジから見ても尋常なものではないのである。

妙にきれがあり、目で追うのが難しいほどのスピードを誇り。しかもそんな動きをしているのは若い男でも女でもメイジでもない単なる平民の老人なのであった。

「あの老人はなにものだね？ワシも長い事生きているがあんな強い奴は見た事がない。しかもあの男まだ本気を出していないように見える」

流石オスマンはベテランである。そうこの時点では亀仙人はまだ本気を出していない。

天下一武道会の予選で雑魚を相手する程度の力しかまだ出していないかったのである。

「しかも奇妙なのは『ガンダールヴ』の紋章を持っている事だ」

「そうですね、あの強さなら兵器なんて必要なさそう、いやガンダールヴ自体がそもそもですね」

「ですが…一体平民がどこでどう修行すればあんなに強くなるのでしょうか？やっぱり王室に報告すべきではないでしょうか？」

「いや…もう少し様子をみよう」

校長室ではこんな事が話し合われていた。

一方亀仙人は…

「んもお！あんたったら校則違反で私が裁かれるのよ！！」

「いやあすまんすまん、久々に武道家としての血が沸いてきやつてのお、じゃがあいつまったく強くないからあんまりおもしろくなかったわい」

いつもの能天気な感じでそういうがルイズは自分の学院生活にかかわる事なので激怒していた。

その後、ルイズはもちろん、亀仙人を見る目がかわったのは言うまでもない。

それから数日後…

「…げっ！この前のお爺さん！！」

「ん？お主はこの前ワシに喧嘩を売ってきた輩かの？」

たまたま昼休みに亀仙人はギーシュと出くわしたのであった。

「なんじゃ？また喧嘩か？」

「そそそ…そんなわけないじゃないですかお爺さん、僕は平和主義者なんですよ、ハハハ」

ギーシュの態度は数日前とくらべると180度ぐらい変わっていた。まず亀仙人に対して妙に礼儀正しくなったのだ。

ちなみに頭にはまだ包帯を巻いていた。亀仙人は全然本気でやっていなかったがその攻撃はギーシュにとっては重傷ものだったのである。

「まあまあ、そう負けたからって、そういう振る舞い方をする事はなからう」

「お主は力は弱そうじゃが、ちょっとこの世界じゃあワシらとは違うみたいじゃが魔法というものはほぼ「気」じゃ。「気」を使った技ならもしかするとワシを越えられるかもしれんぞ」

「ほ…本当ですか!？」

「それはお主の努力次第じゃ」
そう言つて亀仙人は去つた。

＊その日の夜＊

「…あれ？」

ルイズが目を覚ますと、床に布団をしいて寝ている亀仙人の姿がない。

「あいつ夜にまでギーシュを指導してるの？」

ルイズは広場にいつてみた、そこには亀仙人の姿があつた。

「ん!!」

ガッ!

亀仙人は上半身裸でよくわからない動きをしていた。

(なにやってんのよあいつ…しかも爺のわりには随分筋肉質ね…)

その時亀仙人から何気ないオーラがでてきた。

(な…なに!?)

その瞬間、亀仙人が筋肉ムキムキになった。

ちよつと巨大化している。

そう、『フルパワー状態』である。

年老いた今でこそこの形態でいられる時間は短い。が山をぶつ飛ばしたり月を消したりできる。

その時亀仙人は空を見た。

「か・め・は・め…」

(な…なによ?)

「波……！！！！」

ゴオオオオ！！！！

蒼白く太い光線のようなものが空に飛んでいく。

王都、トリスタニア、王城「おお！姫様、あれは！？」

「……すごい」

光はトリスタニアからも目撃できるほどのものであった。

学院

「ふう……さて寝るかの」

「ちょ……ちよつとあんた！」

「ん？ルイズ、お主いたのか？」

「いたのかじゃないでしょ……なによ今の？」

「かめはめ波じゃよ、ワシが50年かけて編み出した技じゃ」

「ご……50年！？あんた何歳！？」

「330……ぐらいじゃったかな？」

「うそお……！」

学院内ではオスマンが300歳と言われているがこれほど長寿な人間をルイズは生まれて始めてみた。

それだけでも驚きなのにこの後すぐにもっと驚きの出来事がおこった。

ズシーン！

「な……なんじゃ？」

「え…？ゴーレム！？」

なんと学院内に巨大なゴーレムがあり、屋根を引き剥がした後学院をゆっくりと去っていったのであった。

「な…なんなのよあれ？」

「こりゃあ大変じゃのお」

翌日、教員全員と目撃者であるルイズ・亀仙人・キュルケ・タバサは召集された。

オスマンは四人に対し事情聴取を行い、そして情報がでた。

犯人は土くれのフーケらしき人物だという。

「王室に報告しては間に合わない。それに学院の面子に掛けても杖は我々の手で取り返す必要がある。誰か志願する者はいないか？」

しかし志願するものはだれもない。

ちなみにフーケに奪われものは破壊の杖（正体は米軍のM72 1aw、使い捨て対戦車弾）である。

皆さんご存知のとおりとあるアメリカ兵が持ち込んできた場違いな工芸品である。

兵器よりも圧倒的な強さを誇る亀仙人には関係ないかもしれないがハルケギニアには多数の地球製兵器がある。

原作で確認できる奴でもM72を始め当初連合軍パイロットから恐れられた日本の傑作機、零式艦上戦闘機（通称零戦、外見から五二型以降のもの、多分）。英国のリー・エンフィールド（っぽい）。

旧ソ連のAK小銃。

連合軍戦車隊からパンテルと共に恐れられていたドイツのティーゲル（1かケーニヒスかは微妙）。自動拳銃などがありさらにアニメにはおおいなる槍として8・8cmFlak 18/36/37（

のようなもの）が登場した。

他にもミリ×ゼロ魔の二次創作では

八号やチハ、90式戦車、大和などのメジャーなものからにぎつ丸などのマニアック兵器が登場していたりするがもちろん二次創作なので原作にこれから登場するかは不明。

ミリ×ゼロ魔系の二次創作では軍需工場が建設されさらに地球とも繋がったりしているので補給に困る事はなくなっている場合が多いが原作では補給が絶望的で今あるものを使うしか方法がない。

（最も亀仙人が地球の兵器を使う意味はない気がするが…）

- 閑話休題 -

さて誰も志願しないなかルイズは真っ先に杖をあげタバサやキュルケも杖をあげていった。

「…ワシもいつちやおーかな？」

亀仙人は杖も持っていないので拳手した。

こうしてハルケギニアではチート級に強い亀仙人とルイズ・キュルケ・タバサによる破壊の杖奪還班が結成されフーケが潜伏しているという小屋へ向かったのであった。

第四話 新たな敵（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしております。

MAXパワー かめはめ波を見た時の衝撃はすごそうです。

第五話 つよくて悪い土くれのフーケ

＊某所小屋＊

「ここね」

ここはフーケが潜んでいるという小屋である。

とても質素なつくりで台風がきたらブツ飛びそうなかんじの家だ。中に入るとガラクタだらけでなにがなんだかよくわからない。

「…これ」

タバサが何気なく指をさした方向にはなにやらハルケギニアではとても珍しいものがあつた。

「これはロケットランチャーじゃないか、でもワシの世界にあるものとは違うみたいじゃな」

そう、それこそまさに、アメリカ軍のM72 lawである。

現在でも撃破目標を変えて使用されている（今の戦車に対しては力不足だから）

その瞬間！

メリメリ…

突然屋根が剥がされ、気がついたら破壊の杖はもっていかれました。

「ああ！破壊の杖が！！」

ルイズが叫んだ。

「表へ出よう」

亀仙人が一行を誘導し表へ出ると巨大なゴーレムがいた。

「うむ、間違いない、ワシらが昨日みたのと同じものじゃ」

「…！！！！」

亀仙人は気がついた。ゴーレムの肩に乗っているのは、女性だという事に。

「おおお！！！！」

BGMはDB初期でお色気シーンとかに使われたりするアレ…という設定で

「まずい…フーケって女だったわ…ちよつと亀仙人！」
ルイズは亀仙人を止めようとしたが亀仙人はいうことを聞かなかった。

「大丈夫じゃ、ワシがやっつけてやるぞい！」
ピヨーン！

そう言つて亀仙人はジャンプしフーケの横にやってきた。
「あ？」

「へへ…ちよつと失礼」
ちよつと早口でそういったあと、亀仙人の手はフーケの胸を揉んだ。
「…！！」

「おお、ええの…ばふばふができそうじゃわい」
亀仙人の顔は変態モードになった。

「…この…ドスケベジジイ！！」
ドッゴオン！！

「ぎゃああああああ！！！！」
フーケはおもいきり亀仙人を蹴り飛ばし亀仙人はぶっ飛び、そして木を5本折りそして落ちた。
「ちよつと亀仙人！？」

「か…かぺぺ…」
偶然捨ててあつた斧が頭に刺さつてた。
「ちよ…これ死んじゃうじゃない！？」
常人なら死ぬが実際原作で似たような事をチチにやられ生還しているので問題はないがそのあと起き上がり復活、と思いきやたまたま

そこには太い枝がありそこに頭をぶつけ気絶して倒れた。

「なんでこんな時だけ気絶するのよ！！！」

ギャグキャラ色が強いから。

その頃、キヤルケやタバサが魔法で応戦するが巨大ゴーレムはそれを弾いた。

「まずいわね」

亀仙人が離脱中の今M72のみがゴーレム撃破が可能な威力を誇るのだがその使い方を知るものはここにいない。

「はーっはは！破壊の杖は貰いよ！！」

「ついでに証拠隠滅の為に貴女達も倒してさしあげましょうか？」

「うるさい！あんたから破壊の杖をうばうまでは負けないわ！」

ルイズはあくまでフーケと戦うつもりだがこの状況だとうあがいたところでフーケに勝てる見込みはない。

「でも…無理よこんなの、魔法が効かないのよ！」

キュルケも勝てないと思っていた。

（なんでこんな時にかぎってあいつが戦闘不能なのよ…）

ルイズはちよつと怒った表情で伸びている亀仙人を見た。

シュタア…

その時、ルイズ達にも、フーケにも人の気配を感じた。

「なによ？あいつ？」

その人はフーケの目に入った、ルイズ達もうしろを振り向くとその男の姿が目に入った。

特徴は亀仙人より背が高くかつ亀仙人よりも筋肉質で、亀仙人同様禿で、化け物なのか目が三つあった。そうDBファンの皆様ならお分かりでしょう天津飯です。

ただし亀仙人がZ初期なのに対し天津飯はもっと古い時代からきたようであった。

服装は無印後半からZ初期までは上シャツ下緑の胴着だったがこの天津飯は上シャツ下青紫のような胴着を着ている。ピッコロ大魔王編あたり、心を入れ替え武道家として生きて行く事にした頃の天津飯である。

「なに、貴方は！？」

「お前、悪事を働いているようだな。見ていた」

「俺も人の事を言えんほど昔はやったが、今は1人の武道家だ。武道家としてお前は許せん」

ただし亀仙人がぶっ飛ばされた後にきたので亀仙人の存在には気がついていない。

天津飯はこれから戦うかのように体を構えた。

「アッハハハ！まさかこの30マイルもあるゴーレムを相手に素手で戦う気！？メイジでも倒すのが難しいのにまったく馬鹿ね、アッハハハ！」

フーケは巨大ゴーレム相手に素手で戦うなどきいたこともなくまたそんなことにしても瞬殺されるのがオチだと思っていた。

しかし。

「たあ！」

天津飯は突然、消えた。

「消えた！？」

だが本当に消えたわけではない、見えないスピードで動いているのだ。

（この時天津飯の戦闘力は180だが同じ頃の悟空もできるし超神水を飲むまでは悟空と天津飯は大体互角であった）

その時ゴーレムの前に現れ…

「てえあ！」

ドブッ！

天津飯の拳はゴーレムの腹に炸裂、数秒たってゴーレムは崩れ始めた。

「そ…そんな…30マイルのゴーレムをパンチ一発で…」
フーケはこっちは睨んでいる天津飯を見て恐怖を感じた。
なお天下一武道会くピッコロ大魔王編、つまり初期の天津飯でさえ
亀仙人を上回る実力を持っている。

「こ…こうなったらこの破壊の杖を使って！」

「…！」

フーケが破壊の杖ことM72をこっちに向けてきた。

「伝説どおりならこうすれば発射できるはずよ！」

もう一つのM72でアメリカ兵がワイバーンを撃破した伝説の通り
にM72を使った。

使用方法はあっていた。そして。

「死になさい！！」

カチッ

ドッ！

弾が発射され天津飯目掛けて飛んでいく。

「…はあ！！」

ガシッ！

「そ…そんな…！」

たちまち弾は天津飯につかまれ、戦果をあげる事はなかった。

「くそ、もう一発！」

カチッ…

「…あれ？」

「ふん、使い捨て兵器だったようだな」

…こうして破壊の杖を取り戻しフーケを捕まえる事に成功した。

「いたた…年寄りを少しはいたわらんかい…あれ？フーケはどこじ
や？」

「む…武天老師様!？」

「あれ?お主は天津飯ではないか？」

だが亀仙人も違和感を感じた。亀仙人が知っている今の天津飯とは体つきも顔つきもちがった。

だが亀仙人は確信した。ただでさえドラゴンボールのような反則的なアイテムが自分の世界にあるしここにも地球の兵器があるのだから自分よりも過去の時代から人が流れてくることだってあると思った。

「…というわけで、ですが俺が気がついたときには武天老師様も餃子^{オス}もいなくて」

「そうか、やはりお主はピッコロ大魔王の時の天津飯か」

「え?どういことですか武天老師様？」

「ああ実は、信じられないかもしれないがワシはピッコロ大魔王もその息子も倒されてからしばらく経った時代からきたんじゃ」

「え!?!?…ということはピッコロ大魔王は死んだのですか!?!？」

「まあ、子供は生きているが心配ないじゃろう。悟空もおるし」

「孫悟空はまだ生きていますか!?!？」

「そりゃあもちろんじゃ」

「…」

天津飯は自分のしっている事とまったく違うことを亀仙人の口からしりしばらく口からなんの言葉もでなかった。

しかも自分の目の前にいる亀仙人は天津飯にとって未来の亀仙人であるから驚きであった。

一方ルイズ達は亀仙人達の話にまったくついていけなかった。

その後フーケは捕らえられ閉じ込められたとか。原作どおりの処置が行われた。

第五話 うよくて悪い土くれのフーケ（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしております。

ちなみにタイトルは盗賊絡みでDBアニメの某話っぽくしてみました。

第六話 トリスティンのアンリエッタ

フーケが捕らえられた翌日、天津飯が小屋から出てきた。

この小屋はオスマンがお礼として魔法で建設したものであった。

ここには天津飯が住むことになった。できれば帰ってピッコロを倒したい所だが帰るにも方法がない為、やむなくここトリスティン魔法学院で暮らすことにしたのである。

しばらく家でゆっくりしていた天津飯だがある異変にきがついた。

昼になると生徒達が一齐にでてきた。

「な…なんだ？」

丁度天津飯は訓練を終え昼食をとろうとしていた時だった。

「おお天津飯、今日はええ日じゃぞ」

「武天老師様？どうされたのですか？」

「なんでもこの国のお姫様がくるそうじゃ、楽しみじゃのおどんな娘かのお」

「…」

天津飯は言葉も出なかった。どうせこの老人の事だからスケベな事を考えているのだろうと思った。

「ちよつと亀仙人、もうすぐ姫様がくるから並びなさい、失礼よ」

「はあゝい」

やけに素直な亀仙人、なんでもこの国のお姫様であるアンリエッタは相当なおっぱいの持ち主である。また非常に美しく男子のみならず女子からの人気も高い。

そんな亀仙人好みの人、亀仙人がウハウハにならないわけがない。
「えっと…天津飯だっけ？あんたも来なさい、姫様が来る事はとても光栄なのよ？」

「え？ああ…」

天津飯もルイズや亀仙人と共に正門に並んだ。

生徒達の視線はアンリエッタが来るまではルイズ達の目にいつていた。

使い魔の亀仙人はギーシュのワルキューレをあっさり倒した後ギーシュ本人も倒し天津飯も30メートルにも及ぶ巨大ゴーレムをパンチ一発で倒した、この事は今学院内でよく知られる事となっており同時に平民という設定でありながら憧れの存在にもなっていた（特に男が魔法でも腕力でも彼らのように強くなりたいと思っている）

ほか今日天津飯が訓練している所を見て天津飯にホレた人がいた。

「え？貴方あの三つ目の人が好きなの？」

「はい！ワイルドさにホレました！」

シエスタである。しかもランチと同じ理由であった。

「どうぞ」

その時扉が開けられ、フードをかぶった女性がいた。
フードをとると…

「姫殿下様！」

「うひょおお！！」

つとここで亀仙人が暴走。

「あ、あの馬鹿！」

「武天老師様？」

「おお！貴女がトリステイン王国のお姫様ですか！？」

亀仙人はただいま変態モード全開である。

「え？は…はいそうですけど？」

「うひゃーええのーええのー！ええ乳しとるわい！」

「えっ？ちょ…ちょっとおじいさん！」

亀仙人は見境なしにアンリエッタのおっきなおっぱいを触るのであった。

「こら貴様！姫殿下様に手を出すな！」

「こりゃなにをする！」

「なにをするってこのジジイ！相手を考えろ！！」

アンリエッタを守ろうと必死の兵士達だが…

「馬鹿者！よいではないかお姫様の乳触るぐらい！、お主達だって触ってみたいとは思わんか？」

「う…それをいわれると…」

「じゃあワシらで触らんか？よし決まりじゃまずワシからじゃ！」

「は…はい師匠！」

「ええええ！？」

アンリエッタは困っていた。そして助けてください目線でルイズのほうをみた。

「ったくあのジジイ…姫様にまで手を出して…」

これがトリスタニアだったら亀仙人とその兵士は処刑ものである。

「天津飯、私は亀仙人をぶっ飛ばすからあんたは兵士3人を倒して」

「あ…わかった」

天津飯とルイズは構えた。そして！

「あんたは馬鹿かああ！！！！」

ゴンッ！

「あだっ！」

パシパシパシパシ…

「いたいいたいいたい…！！」

スパコーン！！

「あゝあゝあゝ！！！！でも幸せでしたよー！！！！」

ルイズは膝で亀仙人の後頭部を蹴った後亀仙人の顔に往復ビンタをしさらに蹴り飛ばし亀仙人は口。ツト団のように空高くあがった。

その頃天津飯は。

「たあ！！」

バキィ！

まず1人の兵士の顔を蹴り。

「あ、この野郎！！」

「ふっ！」

ゴンッ！

襲ってきたもう一人の兵士に裏拳で攻撃し。

「おらあ！！」

「てえあ！！」

ドゴォ！！

飛びかかってきた兵士の顔面に思いっきりパンチをした。

そして、ルイズはアンリエッタのほうを申し訳なさそうな顔でみた。

「ごめんなさい姫様！私の不注意で使い魔が！私はどんな罰で受けます！」

「い…いいのよルイズ、あんまり気にしていないから…」

「ありがとうございます姫様」

このちよつとした騒ぎはアンリエッタ胸揉み事件として後世に伝えられる事になる。

「ところでルイズ、頼み事があるのですが」

「え？頼み事？」

その後、ルイズの部屋。

ここにはルイズとアンリエッタ。亀仙人に天津飯がいた。

だが亀仙人は椅子にロープで縛り付けられていた。

ルイズの案でアンリエッタにセクハラできないようにしたのである。

「おいルイズ！こいつをほどかんか！」

「今ロープを解くとあんた絶対姫様にセクハラするでしょ！」

「うう…そんなことせんわい！」

亀仙人はちよつと黙り込んだが反論した。

「あの…それ老人虐待じゃないですか？」

「う、ごめんなさい」

アンリエッタには逆らえないのでとりあえず老人虐待と言われるのを避けるため亀仙人を自由にした。

「ふう…、まったく近頃の若者は年寄りの扱い方も知らん」

「つてあんたが姫様にセクハラするからいけないんでしょ！」

「…」

天津飯は完全に呆れていた。

「あの…話してもいい？」

「あ、ごめんなさい姫様」

「実は…」

彼女が言うにはトリステインとゲルマニアは同盟関係を築こうと、アンリエッタとゲルマニア皇帝の婚約が進んでいると言いがアンリエッタは結婚したくない。

だがアルビオン王国では最近レコン・キスタという貴族連合が革命を起こし明日にも王制がなくなるかもしれない状況だった。

レコン・キスタはトリステインとゲルマニアの同盟を阻止しようと画策していた。

そして、かつてアンリエッタがアルビオン王国のウェールズ皇太子に出した手紙の中に、それを行えるだけの材料になるかもしれない内容の物があるという。トリステイン王国としてはそれをレコン・キスタの手に渡る前に、回収する必要があったのである。

そんな事を頼めるのは親友であるルイズぐらいであった。

「お願いします、危険なのはわかっていますが信頼できるのは貴女だけなんです」

「なんじゃ？好きじゃない男と結婚するぐらいなら断ればよかつた」

「しかし武天老師様、アンリエッタ姫の話をきくかぎりでは国家レベルの話です。下手な事をすれば戦争に発展します」

「この国強いんじゃない？」

「いえ、ハルケギニアでも最低レベルの軍勢力です」

「ありや」

亀仙人はコケた、そうトリスティンはハルケギニアの中では最弱かも、それこそガリアが悟空だとしたらトリスティンはヤムチャであると同じような状況であった。

「…わかりました姫様。私が必ずやウエールズ皇太子にお会いして手紙を受け取って参ります」

「ありがとうルイズ」

続いてアンリエッタは、ルイズと話をしていた時とはちがいやけくそな感じで亀仙人に言った。

「あの…使い魔さん、ルイズをしっかりと守ってあげてくださいね」

「ワシも行くのか？」

「あたりまえよ、使い魔はご主人様を守らなきゃいけないのよ」

「そ…そうか、仕方ないなワシらもいくか」

亀仙人は天津飯のほうを向いて言った。

「え？俺もですか？」

「あ、貴方使い魔じゃないみたいですが…貴方のほうが頼れそうです。お願いします」

亀仙人はコケた。

アンリエッタの目には天津飯のほうが信用できそうだったのである。

「あの、そのアルビオン王国へはどれほどの距離で？」

「えっと…アルビオンは浮遊大陸で正確な距離はわかりませんが今でしたらだいたい300kmぐらいです」

「…武天老師様、簡単にいけます。俺今ジェット機のカプセルを3

つぐらい持っています」

ジェット機、もちろん現実にはないドラゴンボールに登場する架空の飛行機で武装もないが航続距離がやたらと長くまた5人ぐらい乗る事ができる便利品だ。

速度は筋斗雲に多少劣るくらいである。

「そうか！天津飯よくやったぞ！」

「カプセル？」

「ああワシらの世界の生活必需品じゃよ」

そう言われてもいまいちわからなかったので皆で庭に出てみせてあげた。

「これ！？こんな小さなものがなんの役にたつの？」

それはとつても小さなカプセルだった。サイズは原作どおり。

それを天津飯はカプセルにあるボタンを押し投げた。

すると煙が出て中からジェット機があらわれたのである。

「なにこれ！」

それがルイズの第一声だった。

そもそもルイズは飛行機の存在する知らない。

「さあ、これに乗ってください、ではアンリエッタ姫、アルビオンとやらに行ってください」

よくわからないがルイズは飛行機にのった。もちろん亀仙人もいる。

天津飯は扉を閉めるスイッチを押し、発動機を始動させた。

ジェット機特有の音が学院内に響いた。

その時突然飛行機は飛び上がったのである。

この飛行機はハリヤーやF-35のように離着陸ができる。

ゴオオオ…

音速でアルビオンへ向かった…

なお地図はアンリエッタから貰っているのでなんとなく位置はわか

る。

果たして手紙を取り戻すことはできるのであるのか？

第六話 トリステインのアンリエッタ（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしております。

いっそのことウェールズ助けちゃおうかな？と思ったりしています。

第七話 アンリエッタ様もビックリ アルビオンでファイト

ゴオオ…

天津飯・亀仙人・ルイズを乗せたジェット機は巡航速度900km/hぐらいで飛行する。

もつと出せるがこの機はこれぐらいが燃料効率が一番よい。

「あ…あんたたちって本当に何者なの？」

そんな事をきいてくる。なんせ時速900km/hで飛ぶ飛行機などルイズは聞いた事がない。

（ハルケギニアでは地球と単位が違うがハルケギニアの単位になおして説明しルイズはその速度を知った）

「ワシらはただの人間じゃよ」

それは真実であった（天津飯は宇宙人らしいが）

「う…うそよギーシュやフリーケのゴーレムはあっさり倒しちゃうしこんな竜もってるし」

「地球がそれだけ進んでいるということじゃよ」

「…」

ルイズは言葉を失った。本当にすごすぎてなにもいえないのである。しかももうアルビオン大陸は見えていた。

「アルビオンの領空に侵入します…」

「ちょ、ちょっとこのまま侵入するの！？アルビオンはハルケギニアでもトップクラスの竜騎士隊をもっているのよ！迎撃されるわ！」

「大丈夫じゃ、竜ごときじゅこいつは迎撃されんよ」

一方

レコン・キスタ軍旗艦「レキシントン」

「ふーふーふ、ん？」

遠くからなにかが飛んでくるのが見えた。最初は竜かと思ったが…
ゴオオ…

「…な…なんだありや？」

飛行機の中

「ちよつとあれレコン・キスタの戦艦よ!？」

「大丈夫大丈夫、こんだけはやかったらミサイルでもないかぎり弾はあたらん」

「万が一撃墜されてもワシらは大丈夫じゃよ」

この時ルイズは思った。こいつらつてもしかすると無敵なのでは？と。

アルビオンにはスコットランドという場所があり現在ウェールズはそこに滞在している。

アルビオン軍は総勢19万8000人の兵士を抱えているがそのうちの17万がレコン・キスタに寝返っており王国軍は圧倒的に劣勢であった。相次ぐ敗退の末スコットランドが最後の砦となった。

「ところでルイズ」

「なによ？」

「今思っただんじやが、手紙ごとウェールズとやらを連れて帰ればよいんじゃないか？」

「ええ!？そんなことできるわけないでしょ!！」

「まあまあ、ワシに任せんかい」

「つきました」

天津飯は飛行機を着陸させた。

そこには兵士が立っていた。こちらを警戒しているようだ。

「なんだ貴様ら！？レコン・キスタか」

「へ？」

亀仙人達は残念ながら歓迎されなかった。王国軍の陣地の中に強硬着陸してしまったのである。

てつきり兵士達はレコン・キスタの輩かと思った。

「おのれ…ウェールズ様に手出しはさせんぞ！」

「こりやまたんか！ワシらはレコン・キスタではない！」

「黙れ！我が軍のマークをつけていなければトリステインやその他の国家の国旗もつけていない奴などレコン・キスタにきまっている」天津飯の飛行機にはカプセルコーポレーションのマークしか描かれておらずアルビオン軍からみれば怪しいのはあたりまえだった。

アルビオン兵は剣や槍、銃を構えておりいつでも亀仙人たちを殺せる状態だ。

「武天老師様、奴らは俺たちの話を聞こうとしません」

「うゝむ、手荒な真似はしたくないのじゃが、しかたないようじゃのお」

「え？ちよつと2人ともなにをする気？」

「ルイズ、飛行機の中に隠れているんじゃない？」

「ここは俺たちにまかせろ」
話をきこうとしないアルビオン兵と戦う覚悟をきめた亀仙人と天津飯。

2人は体を構えた。

「うおお!!」

アルビオン兵が1人襲いかかってきた。ほかの人たちも次々と亀仙人達の所にくる。

5mぐらいまで迫ったところで亀仙人と天津飯は素早く動いた。

「消えた!？」

「ぐあ…」「ぎゃああ!」「ごぶっ!」「おえっ!!」

次々と兵士達はやられていく。そして最後の1人が。

「ぎゅあ!!」

バキィ!!

「やれやれ、人の話はきかんか」

亀仙人と天津飯は無傷であった。

「ん? 誰じゃあいつは?」

そこに立っていた男は金髪の美青年であった。どうみても王族である。

「君達はなにをしにきたのだね?」

「ま…まずいですよ、もしかするとあの人がウェールズかもしれない
せん」

「それってどういうことじゃ天津飯?」

「…我々が敵に見られるということですよ」

そう、ウェールズは見ていた。亀仙人と天津飯が自分の兵士をなぎ倒していくところを。

亀仙人達は自衛の為に戦ったとはいえ追われている身から見れば亀仙人達はどうみてもレコン・キスタだ、自分の兵士を戦っていたからだ。

(あの…馬鹿!)

ルイズはもうだめだと思っていた。が。

「あれ？君、その手紙は？」

ウェールズの目にはルイズがもっていた手紙が映った。

「…これはアンリエッタからの、もしかして君たちはトリステインの…？」

「はい！トリステイン王国より特使として派遣されましたルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、こっちは使い魔の亀仙人、あとは付き添いの天津飯です！」

「…こ…これは失礼な事をした！ささどうぞ！！」

ウェールズは部屋へ案内した、『来賓室』という名の。

ウェールズは机を挟んで向かいの席に座った。

「ようこそアルビオン王国へ、といっても今や国土はこころへんだけなんです」

まずウェールズはアンリエッタからの手紙を読む。

その内容は亡命を進める物だ。

「なんじゃ？お主の軍はそんなに劣勢なのか？」

「はい、我が軍は一個中隊レベルの兵士に対し敵軍は町人まで徴兵し今や陸空軍合わせ24万8000人の大軍を編成しています。このままでは我が軍には勝ち目がありません」

「それでどうじゃ？その手紙を呼んでお主は亡命する機になったか？」

「いえ、我が軍は決して降伏もしなければ、亡命もしません。我が軍は強い精神力を持っているが敵軍は貴族のただらした所をそのままつけついでいる！我が軍は最後の一兵まで戦い抜く志であります」

「お主、本当にそれで悔いがないと思っているのか？」

「はい」

「ワシの世界でもかつてピッコロ大魔王が現れ人間を殺していった」
「当時ワシは若く武泰斗様の元で毎日修行しとった。そんな時ピッコロの魔族軍に徹底抗戦を宣言し立ち向かった国家があつた」

こもろんドラゴンボールにはない架空の話の話であるが亀仙人若き頃ピッコロ大魔王が猛威をはらっていた。

ところが大東帝国という地球の東側にあつた国が国家を挙げピッコロ大魔王率いる魔族軍に宣戦布告をしたのであつた。

今の東の都を拠点とするその国は陸海軍共にかなりの戦力を持っていた。

その国は西で猛威をふるっていたフライデンプルグ第三帝国と手を結び共にピッコロ大魔王の軍と戦い始めた。

エイジ460年3月27日魔族が占領していた南洋のとある島に大東帝国は空母6隻からなる艦艇30隻の艦隊で奇襲攻撃を敢行、300機以上の航空機が作戦に参加するが島の魔族を壊滅させたのと引き換えに航空機138機を失った。

同じ頃フライデンプルグ第三帝国陸軍は西の都から30km/hにある魔族陣地から電撃戦を展開。

だが開戦一週間後これに怒ったピッコロ大魔王は自ら前線に立ち反攻を始めた。

当時最強を誇っていたフライデンプルグ第三帝国はエイジ461年5月7日降伏、大東帝国も本土決戦で歴史的な大敗を晒し8月15日降伏した。

ちなみにこの頃の軍隊が丁度現実世界でいう第二次世界大戦レベル

のものである。

この時稼動可能な艦艇は38隻にまで減っておりそのいずれもが使えないような小型館であった。

結果的にピッコロ大魔王は封じられその残党は亀仙人達の手によって倒されている。

ちなみにフライデンブルグ第三帝国總統は復活のフュージョンで出てきたあの独裁者である。

本名はフリードリヒ・フォン・ヒトラーだとか（今勝手に名づけた）

- 閑話休題 -

「お主が助かれば、あとで国を建てなおせる。レコン・キスタから領土を奪回すれば」

「！！」

そのときウェールズが…覚醒した。

「そうか！！そういえば！！その手があったか！！」

「私は今気がついたぞ！！ここで武勲をあげくだばるなら！！一度身を引いて国を解放する！！これはすばらしい！！そうか私の使命は死ぬ事ではない！アルビオンの民をいつかレコン・キスタから解放することだったのか！」

ジ。ングの変な辻中佐のように突然目覚めたウェールズ。

天津飯とルイズはこの男大丈夫かと思った。

なによりウェールズの亡命が決定したので政府上層部と共に逃げ出すことにした。

ウェールズは一番安全な天津飯のジェット機へ、ほかは王室軍最後の軍艦「プリンス・オブ・ウェールズ」でトリスティンへ逃げた。

「プリンス・オブ・ウェールズ」は皇太子という意味だったりであるが地球に存在していた同名の戦艦が日本軍の攻撃機に撃沈され大艦巨砲主義の終わりを教えたのはわりと有名だったりする。

その後…トリステイン。

「えっ？嘘…ウェールズ様も？」

ウェールズ生還の報告をきいてまず驚いたのはアンリエッタだ。

「はい、最も大っぴらに言いますとレコン・キスタのスパイに暗殺される可能性がありますので学院に身柄を隠しておりますが」

マザリー二枢機卿は詳細を言った。現在ウェールズは学院で見柄を隠している。

ばらせばレコン・キスタがウェールズを暗殺しにくるはずであるからだ。

しかしウェールズの生還を快くよるこんだ人がいた。アンリエッタだ。

「よかったわ…ありがとうルイズ…」

一方レコン・キスタにのつとられ、共和制へと移行したアルビオン

「あの王子はどこに隠れている？」

「トリステインに亡命したのでは？トリステインとアルビオンの王の子供はお互い好意を抱いていると私は以前きいております」

「なるほど、トリステインのアンリエッタが亡命を進めたた、トリステインへ侵攻する必要があるな」

早速アルビオンは軍を総動員しトリステインと開戦する事を決めたのであった。

そんなことは知らずにルイズや亀仙人、そして天津飯達はいつもどおりの暮らしをしていた。

だが…戦争は近し。

第七話 アンリエッタ様もビックリ アルピオンでファイト（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしております。

さて少なくともタルブまでは原作に従いたいと思いますので次回は
竜の羽衣探しに…でも実戦で使うかわからない（おい！）

第八話 地球の兵器！？

翌日

今日も亀仙人はルイズの授業につき合わされている。なんせ使い魔だから。

でも使い魔じゃない天津飯は外で修行をするのだったけど…。

ドン！

地面に手を叩きつけ、くやしそうにこういつて。

「ダメだ！こんなのではいつまでたっても強くなれん！」

「そんな事ないです、十分つよいと思いますよ？」

「…シエスタ？」

天津飯もここにきてから数日はたっているのだいたい主要メンバーの顔と名前ぐらいは覚えていた。

そう今ここにやってきたのはシエスタであった。

「はい、私の曾お爺さんは強い男とのみこうさ…いやなんでもありません！！」

急に顔を赤くして後ろを向き手をバタバタさせるシエスタ。天津飯はシエスタがなにを言おうとしたかわかってしまったためちよつと照れていた。

「シエスタ、その曾お爺さんは強い奴なのか？」

「え？なんでそんな事？」

「いや、強い奴だったら戦ってみたいと思った」

「ええ！？戦うんですか！？」

「いやあ、自分が今どれほどの実力なのか試したくて」

「うーん、でも曾お爺さん5年前に亡くなりました」

そのとたん天津飯の表情がかわった。

「そうか…残念だ」

天津飯はシエスタの曾祖父が強い奴と思い込んでしまった。ある意味では強いお方であるが。

「でも曾お爺さん、私の故郷タルブにいろいろなものを残してくれたわ、たとえば竜の羽衣とかですね」

「竜の羽衣？」

「はい、私たちの村に伝わる一種の宝物です。私の曾おじいさんはそれを纏って空から現れたと言われています。なんなら見に行ってみます？」

天津飯の想像では竜とつくだけあって高価なものに違いないと思った。

別にほしいわけではないがすこし興味があつた。その宝物とやらにこうして宝探しが始まった。天津飯はカプセルからジェット機を出した。

実は燃料はすでに調達できる。すでにコルベールが複製に成功したのである。

さあ2人だけで出発、と思ったら。

「おーい、天津飯なにしてるんじゃ？」

「む、武天老師様？」

「ああ！！お主シエスタちゃんと2人つきりでおのれえええ！！」
「バキィ！！」

「びぎゃあ!!」

亀仙人がぶっ飛んだ。

「違うでしょ!!天津飯はあんたみたいにスケベじゃないわよ!!」

ルイズの言うとおりであった。天津飯はこのじじいをどうしようかと思っていたがルイズが蹴飛ばしてくれたのもうそんなことは忘れしました。

…ということで新たに3人加わった。

「あれ?1人多くないかの?」

「いやあ、竜の羽衣つてやつにちよつと興味があつてね」

「ちょ!ミスタ・コルベール!いいんですか抜け出しても!?」

ルイズがおどろいた様子でいうがコルベールはべつにどうでもいいと軽く言った。

「よし、目標はタルブ村…」

ゴオオ…

天津飯は飛行機を操縦した、その方向はまちがいになくタルブの方向だ。

んで、タルブ

「これが竜の羽衣があるところです」

「なんじゃこりゃ?みたことがないタイプの建物じゃのお」

「武天老師様、これ」

「ん?おお文字が書いてある」

「…海軍少尉、佐々木武雄、異界二眠ル。」

ピッコロ大魔王の反省で地球も軍隊を編成するようになったがそれ以前はレッドリボン軍のほうが強いという有様が続いていた。それ

以前には猛威を振るっていた国家があったもののそれもすべてかつてのピッコロ大魔王に消されている。

「鍵がかかっている、これぐらいなら魔法で開錠できそうだ」

コルベールが建物の鍵をあけ、とうとう中の正体がわかった。

中にはDB世界の地球だと亀仙人ぐらいの歳のやつじゃないとギリギリ知らないレベルの飛行機。

現実だと64年前まで日本の空を元気に飛んでいた飛行機があった。

「ななな、なんじゃこりゃ？」

濃緑色の塗装、日の丸、独特の黒いカウリング、20mmのぶつと
い機銃、加速性能を高めるために採用された単排気管。

そう、日本人なら一度は名前を聞いた事があるだろう。

旧海軍が世界に誇った「零式艦上戦闘機」。その五二型甲である。

「固定化の魔法がかけられているな」

「ほお、こんなものがトリステインにはあったのか」

亀仙人は関心していた。と同時に大昔に似たようなのをみたなと思った。

「そうだ亀仙人さん、貴方はガンダールヴでしたよね、これ動かせないかな？」

コルベールが亀仙人にいうが。

「ガンダールヴってなんじゃ？」

…「ああ!!」

天津飯以外一斉にずっこけた。

「あんたの能力でしょ！兵器を自由にあやつれるっていう!!」

「おおそうかそうか、でもワシは兵器で戦う気はないがの」

「ワシも天津飯も武道家じゃからな、戦うときは人の作ったものには頼りはせんよ」

ところが。

「はあ…はあ…せ…先生こんなところにいたんですか？」

「あれ？君は？」

突然現れたのはギーシュであった。

「大変ですよ！アルビオンがトリステイン王国に宣戦を布告！きつと竜騎士や大艦隊を率いてそのうちトリステインにきますよ！」

「な、なんだと！？」

亀仙人と天津飯以外は驚きをかくせなかったが…

「なんじゃ？アルビオンってそんなに強いのか？」

「この前もいわなかったっけ？アルビオンにはハルケギニア最強クラスの竜騎士をもっているし60隻以上も軍艦をもっているわ！」

「そうですよ、このままだとトリステインが…」

女子2名はどうしようもない絶望感に襲われていた。

トリステインとアルビオン、正々堂々戦争すればトリステインの敗北は明らかだ。

「…」

亀仙人は言った。

「天津飯よ、まちがってる奴にがつんと一発、やるのは悪い事ではないぞい」

「はい…俺たちも戦ってやりましょう」

「へ？」

一同は驚いた。亀仙人や天津飯も戦争に参加するという。

「面白い、修行にもなるぜ」

天津飯はやる気満々だ。

「ワシは一応お主の使い魔じゃし、戦ってやらんといけないからのお」

亀仙人も能天気そうにいう。

「でも亀仙人達空飛べないでしょ？」

「ジェット機には武装はないが、天津飯は空を飛べるんじゃない？」

そいうつた瞬間に天津飯は空に浮き上がった。

「す…すごいです…天津飯さん」

シエスタはなんか感激していた。

「だが、あまり速くは飛べないのが欠点だ」

降りてきて舞空術の欠点という天津飯、初期の頃はあんまり速く飛べない。

サイヤ人編序盤でもラディッツを除いてピッコロが最速であった（筋斗雲と互角の速度）

この頃の天津飯はとりあえず飛べますよぐらいしか空を飛べず200 km/hも300 km/hも速度はでない。

「ただし俺が前に倒したゴーレムがあの程度の強度、竜はもっと弱いはずです」

「うむ、じゃあこの飛行機の機銃でも撃破できるな、こいつかどのくらい速いかにかけよう」

Z時代のように速くは飛べない天津飯、その速度は火竜にも劣るものだ。

力あっても遅かったらまるで意味がない、その為異世界（地球）の兵器がどれほど速く飛べるか、あるいは攻撃力はどのくらいか、アルビオンの竜騎士と戦うにはそれ以外方法がない。

第八話 地球の兵器！？（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしております。

第九話 緒戦

その後、一行は零戦を運搬、学院に持っていき整備を開始した。

「状態はいいようじゃな、どこも錆びていない」

「武天老師様、弾は半分ほど残っています」

「半分か…」

佐々木少尉は空戦中にこちらにきてしまったものと思われその為零戦の機銃には弾が半分しかない。だがここでは補給が絶望的である為、今あるものを使うしかないのである。

一発でも無駄に出来ないのが現状だ。

その夜、某所にてアンリエッタ姫に学院の生徒や教師、そこらへんの人間が召集され志願兵を募集した。

ギーシュは父が元帥である為参戦はほぼ強制である。ルイズは自ら志願。その他にも多数が志願したがそれでも最終的に2千人しか人員が集まらなかった。

規模でいうと戦時中の日本軍のどうでもいい島の守備隊レベルである。

しかも王軍は戦時にのみ編成されるので展開能力は低くしかもあまり志願してこないのはわかりきっているので士官が圧倒的に少ない。各地に存在する諸侯軍のほうが強いという有様だ。

ほかにもトリステインの軍事組織としてトリステイン魔法衛士隊や空海軍がある。

しかし衛士隊のグリフォン隊は隊長のワルドが国を裏切った為急速に弱体化、ほかの部隊も弱体であり練度も某北の国以下のレベルでしかない。

空海軍に至っては艦船が使い物にならない状態で艦隊が編成できず
まともな船といえば巡洋艦イーグルとレコン・キスタに寝返った艦
隊に対抗すべくレキシントン級戦艦の次級艦として建造されたプリ
ンス・オブ・ウェールズ（原作にすら登場しない架空艦）のみであ
る。

（さらに次級としてサウスゴータ級戦艦を建造中であつたが工場が
占領される前に自爆、廃棄された）

3万の王室軍将兵がいるがそれだけでレコン・キスタ政権のアルビ
オンに勝てる可能性というのはほとんどない。

木造船はすぐに建造できるがだからといって今から建造し始めても
間に合わない。現在戦艦1、空母1その他巡洋艦以下10隻を建造
中であるがはたしてその船が就役するまでトリストインがもつかど
うか、絶望的であつた。

＊その次の日＊

「おお！キュルケじゃないか」

亀仙人はキュルケの尻を触った。

「いやゝん、お爺様ったら」

（よ…喜んでやがる…）

キュルケに片思いしていざ、告白といこうと思っていた青年は亀仙
人にケツを触られて喜ぶキュルケをみて諦めた。

さていつもならルイズのお仕置きがありそうだがすでにルイズはい
ない。

なんでもすでにレコン・キスタ（旗艦レキシントン以下14隻から
なる大艦隊）が侵攻してきたという。亀仙人たちは出撃に備えてい
たがまだ燃料の複製が完了していないという。
その時。

「いやあ、待たせたね、竜の血。いやガソリンだったね。徹夜してここまで複製したよ」

「やれやれ天津飯さんの竜、いや飛行機と違う種類の燃料だから少し時間がかかったよ」

「おおすまんすまん、っで誰が操縦するんじゃ？」

「俺がします、武天老師様は地上の敵を…」

「うむ、そうか。まあワシが操縦するより若いお主が操縦したほうが信頼度高いじやろう」

なんせ戦闘機である。何GものGフォースが体にかかる。老人よりも若くてぴんぴんしている男が操縦するほうが確かに安全だ。

「武天老師様、どこでエンジンをかけるのでしょうか？」

「ほい？たしかこれじつ々たような…」

亀仙人はエナジーシャを回した。すると天津飯は適当になんかいじつ々たらエンジンが始動した。

バ…バババ…

僅か1000馬力クラスの栄二一型エンジンは調子よくかかった。

ここいらで零戦がどれぐらいの強さなのかを証明しよう。

中国大陸では中国軍相手に圧倒し太平洋戦争緒戦では米英などの連合軍戦闘機を圧倒した。

アメリカの戦闘機がやったら失速するような動きを零戦はいとも簡単に成し遂げるのである。

防弾を犠牲にした徹底した軽量化は効果を発揮、加速力はとても高かった。運動性能も米軍機の水準を遥かに上回っていた。

しかも世界で最初にフラッター現象に対応できる機体であった。

武装は7.7mmと20mm、当時20mmつたら結構な重武装だった（ただし零戦の20mmは装弾数が少ない上に初速が遅かった

という)

また、当時の日本のパイロットの練度が非常に高かった(あのルフトバッフェ(ドイツ空軍)と同等かそれ以上の)のも加わり、当初は鬼に金棒だった。

しかし日本は負けた、零戦は最初っからすべてを極めておりたいした性能向上ができなかった。

しかも後継機の開発が遅れたうえに米軍は次々と新鋭機を繰り出しそして防弾の無さが影響してかパイロットの損耗が激しく終盤にはベテランよりも新米のほうが遥かに多い始末だった。

零戦とは栄光と没落の飛行機であった。確かに戦闘力は一級品で強いのだが戦闘機としてなにか大事なものがたりない飛行機だった。

今回天津飯が操縦するのは五二型の甲、速度は初期に比べると上がっているものの改良で運動性能が落ちてしまった。ただしそれでも米軍機の水準を上回っている。当機の運動性能の高さがよくわかる。

さて天津飯は離陸していき亀仙人達はその後を追おうとする。

「まって、シルフィードを呼ぶ」

「まあ待て、天津飯から一機もらった。これでいったほうが速いぞ」
…というわけで亀仙人は飛行機を出し操縦していった。

それを見送るコルベールは心配そうだった。いくら地球のテクノロジーが加わったとはいえ戦力差がでかいのは目に見えており戦いに行く事自体正気の沙汰には思えなかった。

＊っでその頃タルブ＊

「グリフォン隊は竜騎士隊を気をひいて、その隙に陸戦隊は舟艇に

乗り込んで」

アンリエッタ姫殿下指揮のもとすでに戦いは始まっていた。

「ルイズ、貴女がいるだけで心強いわ」

（…大丈夫かしら亀仙人達、後からくるっていったけど…）

空中

「食らえ！」

グリフォン隊の攻撃が始まるが機動力で勝る竜騎士隊はその攻撃をあつさりとかわした。

火竜は竜の中でのろまなほうであるが攻撃力は非常に高く八号（日本陸軍の軽戦車）の正面装甲を撃ちぬけそうな感じである。
ポオッ！

「うわぁ！」

「ぎゃぁ！」

「うぇ！」

グリフォン隊はあつさりと撃墜され撃墜された3人のうち2人は炎を直撃、戦死した。

一方地上では日本軍のバンザイ突撃に通じるなにかがあるような突撃を敢行していた。

「進め進め！なんと少しでも船を落すぞ！」

「落すって言うても…あんなのどうやって？」

ギーシュはあきれていた、なんたつて旗艦レキシントンは200メートル以上もある巨大な船体を誇る（強さはともかく海上自衛隊のひゅうがと同等かすこし大きいぐらい）

ドン…

「ん？…うわぁ！…！」

ギーシュら数名は馬から落され数十名は直撃、戦死した。

「舟艇までたどり着けば！反撃は出来る！」

「だ…ダメだこりゃ、負けだ、トリスティンは勝てないわもつ」

ギーシュは完全に諦めていた。亀仙人に負けてからというもの戦いに消極的になってしまったのである。

＊ちよつと遠く離れた場所＊

「姫殿下様！現在王室軍戦艦1隻、巡洋艦1隻がこちらに、援軍のようです」

「ええ、でも…」

（ウェールズ様…）

もはや戦況は絶望的、アンリエッタもルイズもつい先日まで笑顔だった様子がうかがえないほどおちこんでいた。

その時…

キィイ…

ジェットエンジンの音がきこえた。

零戦よりも速いジェット機のほうが先についたのである。降りてきた人物に驚いた。

「か…亀仙人！？それにキュルケやタバサまで！」

「よう、なんじゃルイズ？随分しょんぼりした顔じゃのお」

「まあ元気だしなさいよ、亀のお爺さんと三つ目の男さえいれば勝てるわ」

「でも…」

さらに続くように、今度は聞いた事が無い音がした。

「な…なにこの音？」

「きたようじゃな」

濃緑色の機体と真つ赤な日の丸の国籍マーク、独特の発動機の音。まちがいなく零戦である。

「あ！竜の羽衣！？」

「そうじゃ、あいつは今天津飯が操縦しておる。空の戦いじゃあれしか頼れるものがなくてのお」

…こうして、ハルケギニアの戦史上まれにみる奇跡の反攻劇が始まるのだった。

第九話 緒戦（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしております。

第一〇話 タルプ決戦

空には濃緑色の機体が轟音を響かせながら飛んでいる。

日本男児が精魂込めて造り上げた航空機である。

（武天老師様、先に地上にいましたか。さて…制空といくか！）

天津飯は機体を上昇させその後日本軍が得意とした左ひねりこみをした。

これにより通常の旋回よりも小回りがきく。

照準を合わせ天津飯は機銃のレバーを引いた。

ダダダ…

「うわあああ!!」

竜騎士は鎧で装甲されているが流石に20世紀の機銃に耐えられるものではなかった。

また天津飯も視力がよい為ほぼ弾は百発百中である。

さらに右旋回で敵の後ろへつく。

ガガガ…

次々と敵を撃墜してゆくその姿は地上部隊にとってとても華々しく見えた。

「神よ!」

アンリエッタがそう叫ぶほどだ。

「たった一匹の竜で…」

「な…なんて竜なの?」

「…マチルダ、我々の出番だ」

「…ふん、待ってたわよ」

さてこの2人の出番である。

ワルドは風竜にのって出撃、天津飯が最後の一騎を撃墜した所で登場した。

「ん！？」

ダダダ：

「なに！？」

「風竜：速度は火竜とは比べものにならん。攻撃力はないが：我が力こそ最大の武器！」

ゴオオ！

デルフを持っていれば防げたものの天津飯はデルフを持っていない、零戦の左翼に命中し飛行は可能であるものの燃料がどんどん漏れてゆく。しかも舵が重くなった。

「く：くそ！このポンコツめ！！」

天津飯は零戦を乗り捨ててしまった。

ブオオ：

零戦はたまたま近くにいたレコン・キスタの駆逐艦に命中、駆逐艦は大破炎上した。

「竜の羽衣が！」

「あやつめ被弾に弱いからと捨てやがったぞ」

だが天津飯が乗り捨てた零戦の戦果はたしかなものだった。この駆逐艦は墜落こそ免れたものの航行不能となってしまった。

「ちっ、一発あたるとあのざまか：運動性能はいいし速くて攻撃力も十分だったがあれは致命的だ」

ワルドは天津飯の正面に竜を止めた。

「ほう：貴様空が飛べるのか、こいつは新しい魔法だ」

「ふん、生憎速くは飛べんがな」

＊一方地上では＊

ゴオオ…

「うわああー!!」

「アッハハハハー!! 竜なんぞいなくても私ひとりで十分よ!」

「ふ…フーケ…も…もうだめば¥(^o^)/」

「ま…まずいわ! 亀仙人が変態モードに!」

「わ…ワシあいつ嫌いじゃ」

ぶっ飛ばされたうえに頭に斧が刺さってしかも傷口に枝があたったあの日の嫌な思い出が思い浮かばれる。

「今回はワシ真面目にたたかっちゃうもんねー!」

いつものファンキーさを取り戻した。

「誰かと思えばいつかのおさわり爺さんじゃないの? 貴方になにができるっていのう!？」

「ほい!」

バゴオ!

ゴレムの腹に正拳突き! もう結果はまるみえだ。

ボロボロ…

「いつ!？」

「どう? ワシ強いじゃろ?」

「こ…こうなったら素手で戦うまでよ!」
シュタタタ…

フーケはこっちに走ってきた。しかも…

「速い!」

亀仙人がこう評価するほどの速度で。

「てえい！」

パシッ！

「…なるほど…以前蹴られた時から思っていた事じゃが、お主相当の腕の持ち主のようじゃの」

「ふん、盗賊たるもの、格闘技は得意なのよ！」

「とりゃああ！」

「ほい！」

亀仙人はジャンプでかわした、亀仙人は着地しフリーケのほうに走っていった。

「ほー！ー！ー！」

ガッ！ガッ！バシッ！

「うゝん、ワシの動きについてこれた奴は久しぶりじゃのう」

（い…痛い…！）

フリーケは半分目に涙を溜めながらもどうにか亀仙人の攻撃を防ぐ事に成功した。

だが普通に考えるとこれだけでもすごいことである。

その頃上空では

「んん！ー！」

ワルドは攻撃をしかけるがそれを天津飯はよける。

「！ー！」

「どどん波！」

ビッ！！

天津飯もどどん波を放つが同じようにかわされる。

ただし初速はどどん波のほうがうしろしくワルドの風竜もだいぶ悲鳴をあげてきた。

「く、奴めなかなかやりやがる」

「このままではきりが無い！はやく終わらせなければこっちがばててしまう」

（なにかいい案は…そうだ！！」

天津飯は二つの手を合わせた…その姿勢はワルドからみればとても奇妙であった。

「な…なにをする気だ？」

「でえあああ！！！！！！」

天津飯は手を放した、天津飯の手はぼんやり光が。

その後天津飯はどくどくの形に手をあわせ、照準をあわせる。

（狙いは…奴を含むレコン・キスタの艦隊！）

「お…お前はなにをする気だ…？」

ワルドはとてつもない嫌な予感を感じる。そして！！

「…気功砲！！！！！！」

ゴオオオオ…！！！！！！！！！！

「な…なに！？」

「て…天津飯！まさか！？」

「きゃあ！まぶしい！！」

まばゆい閃光と共にとんでもない轟音が聞こえる。その技の正体に気がついたのは亀仙人ただ1人だ。

…

…

…

「よ…ようやく目がみえるように…ああ！…！レコン・キスタの艦隊がいないわ！！」

「ええ！？」

フーケはうしろをみるとその光景を見て…

「あつ！ない！！」

「あ…あやつめ、使ってはならん技を」

「ど…どういう意味よ亀仙人？」

ルイズが訊いてきた。

「気功砲はとんでもない威力の技じゃ、ワシのかめはめ波の比ではない。じゃがあまりの威力に使用した者への体の負担はおおきく下手をすれば死んでしまう。死なないにしても寿命はまちがいなく減る」

「ちょ…ちょっと！天津飯ってそんな危険な技が使えるわけ！？」
ルイズはおどろいた。なんせ艦隊を一気に吹き飛ばしてしまう威力を誇る技を目の前で見てしまったのである。

その時！

バキィ！

「うわぁ！」

「て…天津飯！」

ドサッ！

その時天津飯はなにものに攻撃された。

上にいたのはボロボロのワルドだ。ワルドはゆっくりおりてきて話をした。

「な…なんとか上空に逃れる事ができた…だがこいつは力を使い果たしてしまったようだ」

その時天津飯は立ち上がった。

「く…俺はまだ戦える！」

「ふふふ…私とマチルダが組めばハルケギニアで最強のコンビが…ってあれ？」

フーケはその時いなかった。そうフーケはもう逃げていた。

シユタシユタシユタ…

（ふん！あんな怪物みたいな奴らとつきあってられるかつてのよ！もう二度とトリステインにはいかないわ！）

この時、ルイズの怒りは最高潮となっていた。

「あ…あんたのせいで…あんたのせいで…」

「まま、待てルイズ！君と私は仲良しではないか！？」

1人で立ちむかうことになったワルドは圧倒的に劣勢だ。もうやめようやというのだが…

「あんたのせいで国はめちゃくちゃだわ！！しかも…しかも…とにかく…裏切りもの！！」

ルイズ初恋の相手であるワルド、それだけにルイズの怒りは激しい。その時ルイズは杖をもちなにかを唱えた。4系統の魔法とは違う、長く聞いたことの無い物だった。

「な…なんじゃ？」

その時アンリエッタがいった。

「4系統以外だったら…もしかして「虚無」!？」

「へ？」

その時平原にふたたびまばゆい光が。その光はもしかすると気功砲よりもまぶしいかもしれない。そしてその光が消えた時。ワルドの姿はなかった。

「…あれ？ぼくたち勝ったの？」

ギーシュがつぶやいた。そして亀仙人はあることにきがついた。

「あああ！さつきまであった遠くの山がないぞい!!」

「えええ!？」

ルイズはかわいらしい寝顔だった。しかしそれとは裏腹にさっきの「虚無」というものはすさまじい破壊力を誇り山を吹き飛ばすほどだった。

「こりやおどろいた、ワシのMAXパワーかめはめ波や天津飯の気功砲に通じるものがあるぞ」

そういった瞬間、トリスティンの兵隊達は…

「勝ったぞー!!!」

「おおおお!!!!!!」

急に土気があがった。一時は劣勢に陥ったものの亀仙人や天津飯、そしてルイズの活躍で見事にレコン・キスタの侵攻を防ぎきったのである。

その時、ウェールズ率いる王室軍が到着したものの…

「ど…どうやら我々の出番はなさそうだな…」

「すごいですね…地図にかいてある山はぶっ飛んでるわ艦隊はいないわ人もいないわ…」

結局生き残ったのは大破炎上した駆逐艦の乗組員のみでそのほとんどは捕虜になったが一部はお国に戻りクロムウェルに結果をつたえている。

「んで？どうなったんだ？」

「はっ！我が軍は大変奮戦しましたが！全滅しました！」

「な…なに！？15隻と数万からなる大軍が！？」

「は…はい」

「…ばっかもん貴様は死刑だ！」

「ひいいい！！！！」

だが戦争は続く、続くつたら続く。とりあえずEND

第一〇話 タルプ決戦（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしております。

意外にあっさりおわっちゃいましたがDBキャラの戦闘力を考える
と妥当かと（笑）

いがいと亀仙人が活躍していない事に気がついてこのままだと主役
の意味がとあせりはじめました、ルイズも虚無のせいでやたら強く
なっちゃったし戦闘力のインフレは怖いこと…

第一一話 講和できるか！？

タルブ戦をほぼ無傷で終えることができたトリステイン軍。

トリステイン国内では…

「アンリエッタ女王陛下万歳！トリステイン万歳！」

という歓声が大音量で響き渡る。

そのころ学院では亀仙人達は沢山のお礼を貰っていた（アンリエッタからもお礼をもらう予定）

またこの名声を背景に女王に即位した。

一方トリステインの議会では今後の戦争とるべき戦争指導について話し合われた。

「確かに国は攻められましたが…トリステインも無傷ですしこちらから侵攻する必要はないと思います」

マザリー二枢機卿ら数名はアルビオンへの侵攻を主張するがアンリエッタの心にはそんな気などなかった。国を守れただけで十分であった。

しかしウェールズはどちらともいえない意見を言った。

「どちらにしてもトリステインは戦争状態でレコン・キスタが再侵攻してくる可能性は十分ありますよ。私もアルビオンに帰らなくてはいけませんし」

「ですが戦争というのはあくまで最終手段でまずは講和といきませんか？」

「講和…ですか？」

「講和なら、戦火を交える事なく戦争を終結できますし。万が一レコン・キスタ政権が再侵攻の意図を見せたらこちらは一度侵攻されてますし、やられる前にやる、というのはハルケギニアではいままでの常識ですから、だからといっていい気分ではないですがそうい

「う道もありますし」

「…ウエールズ様。さすがですわ…」

トリステインとしては早期講和↓終戦といきたかった。だがアルビオン（レコン・キスタ政権）は違った。

ハヴィランド宮殿

「なにに？ 駆逐艦トライバルの生還者がもう1人帰ってきただって？」

「はい」

「…入れる」

クロムウエルは生還者を中に入れた。その男はなんと艦長だった。

「閣下、船員200名のうち100名は捕虜となりましたがそれ以外はみんな生きて帰れました。我々はアルビオン共和国の戦士としてまた次の戦いに参加する意志です」

「どうか私に、駆逐艦クラスでよいので艦長の任を」

「ご苦労。よく帰ってこれたな」

「それはもう、船がないので苦労しました」

「そういう意味ではない、敗将の癖によく帰ってこれたなということだ。ほかにもお前の兵士もアルビオンの騎士として死ぬべきだった」

「へ？」

「任務を果たせなかったものは処刑される、お前は最も責任があるので軍法会議にかけられる前に裁かれる人よ」

「そ…そんな…!!」

♪ちゃらりー、鼻から牛乳♪

まるでレッドリボン軍のような事をいいつけられた駆逐艦トライバルの艦長。

クロムウエルの言う事は尋常じゃない事がこの時わかってしまった。
「ただ、よく軍に尽くしてくれた君の事だ。チャンスを与えてやろう」

「はは！」

「君は確か武道の達人だったな」

「おっしゃる通り、腕には自身がはります」

「…なら、そこにいる先生と戦って勝てたら今建造中のジプシーの艦長という任を与えてやろう。ただし負ければ死ぬのみだ」

その時後ろ髪を結んだ髭面のピンクっぽい変な服をきたおっさんが現れた。

「先生、出番です」

「私の殺し料は半端じゃなく高い、が今年は殺し屋さん20周年記念キャンペーンで半額セールを行っている、ここの通貨で5千万エキュードどうだね？」

「はい、いくらでも払いますよ」

クロムウエルはいやみに金庫をあけ、大量のお金をみせた。男は二ヤつと笑った。

そして艦長のほうをふりむいた。しかしなんの構えもしない。

「…貴様は…手も足も使わず、ベロだけで倒してあげよう」

「な！なめたまねをするんじゃない！」

艦長は流石にキレ、その男の顔面にパンチをした。しかし男は残像を残しどこかへ消えていた。

「なっ！？」

その時！

「べっ」

ズンッ！！

「！！！！」

「……あ……」

ボタン……

「ニヤッ」

「……流石は先生、あの男をあっさりしとめてしまつとは……」

「もっと骨のあるやつと戦いたいですな、こちらも体が鈍っています」

「はは、それでしたらトリステインに丁度いい奴らが」

「ほう？そついえば艦隊が全滅したとききましたかね？」

「はは、艦隊を全滅させるほどの奴らです」

「なるほど、そいつは面白そうですね」

男は髭を触りながら亀仙人達の事をおもしろそうと言った。

その一週間後の事であった。トリステインとアルビオンの講和会議が行われた。

アンリエッタは無駄な戦争を早く終わらせようと主張した。しかしクロムウェルは。

「レコン・キスタの親分として。そんな事はできない」

「たとえ国民が全員玉砕しようとも我々は戦う、断言しよう明日には我が国の40隻からなる大艦隊を今度は王都トリスタニアへ降下を敢行、そうすれば平原のタルブと違って貴様らも思う存分には戦えないだろう」

「…そうですか…」

アンリエッタは非常に悲しそうな表情をしていた。正直に言えばこんな戦争とつとやめて早く平和に暮らしたかった。正直に言えば軍隊もないほうがいいと思っているほどの女の子であった。（ただしハルケギニアのレベルからすると持っていないと危険であるとは思っている）

この会談はまさにトリスタニアで行われたものである。その後アンリエッタはすぐに御前会議を開き今後の戦争方針について話し合う事になった。

「…明日には…40隻の軍艦が攻めてくるそうです…」

「な…なんですと!？」

「…どうでしょう…」

「…そうだ! 亀仙人達なら今日中にアルビオンを攻め落とせるかもしれない!」

「えっ!?! ウエールズ様?」

「私はこの前の戦い、最後のほうに顔を出したのですがわかったのです! あのおじいさんたち普通の人間じゃないことを! 明日朝までにアルビオンを攻め落とせば艦隊は出撃できなくなりますよ!」

「しかしいくらなんでも平民の老人がそんな事…」

「わ…私もできると思います。この目で見ていましたから」

「クロムウエルさんの話が脅しだとしても…怖いです。15隻であれなんですからその3倍にもなれば…」

さらなる犠牲者が出る事は目に見えていた。

それならばアルビオンの宮殿だけ制圧して犠牲者を最小限にすればいい。今後もし再侵攻した場合どっちの国にもものすごい死者が出るのは嫌だからというのがアンリエッタの考えだ。

たしかに宮殿制圧のみなら宮殿の守備隊には死傷者は出るがそれがいには死者はこっちの兵士しかでない。

＊んで2時間後＊

「うそっ！？いくらなんでもそんな危険な任務つけさせられないですわ！」

「ごめんなさいルイズ…何かしらないうちにこんな事に…」

「…姫様のせいじゃないですよ…」

ルイズは突然泣いてしまったアンリエッタを慰めるのだった。

その時亀仙人が入ってきた。

「おお！どうしたんじやアンリエッタ様！？、あ、ちょっと失礼」

されげなくアンリエッタのお尻を触った。

「うひょひょ…ええのーやわらかいのお…」

「…た…ったら…このドスケベジイ！！！！！！！！！！」

スパーンパコーンドスーンバキィー！！

エクスプロージョン

「爆発！！！！」

ゴオオオ…

「いぎやあああああああ！！！！！！！！！！」

亀仙人は吹っ飛んだ。

「よく…わかんないけどとりあえずありがとうルイズ」

「いいですよ、ここで姫様を亀仙人のスケベな手から守れるのは私だけです」

「んー、とにかく。宮殿を制圧すればよいのじゃな？」

「もう復活してるし！」

「よし、やっぱり最後はワシが活躍しなければいかんようじゃの。やつてやりますぞ女王陛下」

一見真面目な事をいつているが今度はアンリエッタの胸を揉んでいた。

それに気がついたルイズは。

「真面目に喋るかスケベするかどっちかにしろー！！！！」

「いたい！すこしは老人をいたわらんかい！…でもスケベしていいんじゃない？」

「あつ！」

ルイズはその時自分の発言を猛烈に後悔した。そして。

「そうじゃあ、胸は揉めが大きくなるというな」

「…だからなによ…？」

その時亀仙人の目線がルイズの超緩やで低い丘レベルの胸を見た。そしてにやつと笑いながら大変変態チックな事をいった。

「お…お主のそのまな板をワシが治療してやるぞい…」

「えっ！？ちょ！ちよっと！」

亀仙人の手がルイズの胸をやさしく…
バキイ！ドゴオ！ガスッ！ブボア！！

「あぎゃああ！！！！」

「やめてください亀のお爺さん！！それ以上は子供に不適切です！！」

そもそもこの物語子供が読んでもの？と思ったのはもちろん亀仙人だ。

ちなみに今亀仙人をボコボコにしたのはシエスタである。なぜかシスタなのに強い。

「お…お主んな強かったつけ？」

「だって、天津飯さんに鍛えてもらっていますもの」

「こりや天津飯…これでは安心してセクハラができないではないか」
たまたまシエスタといっしょにきていた天津飯に文句をいう亀仙人だがそのうしろからルイズが3つのハンマーを。

「セクハラするな！！」

ズドン！！

「ひでぶ！！」

「…と…とにかくレコン・キスタが占拠している宮殿を制圧すればいいんですね？」

「はい」

「わかりました、俺と武天老師様で必ず」

天津飯は戦う気まんまんだ。

しかし亀仙人は…

「お…お主は真面目じゃのお…」

…とりあえず今回はこれでEND、
だけでもうちちょっとだけ続くん
じゃない！

第二一話 講和できるか！？（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしています。

さて今回でできた殺し屋さん、DBファンならもうお分かりかと
笑）

第二二話 宮殿へ（前書き）

注意：タルブ戦以降はほぼ作者の妄想でできています。
原作しかゆるせんという方々本当にごめんなさい。

第二二話 宮殿へ

＊その後＊

すでに飛行機はカプセルから出されいつでもアルビオンへ攻めに行ける態勢だ。

「あの…ごめんなさい…」

アンリエッタはこんな危険な事を部外者にやらせることになったことを非常に悔やんでいた。しかし。

「そう自分を責めてはならん、お邪魔になっているのはワシらじやからの」

「孫悟空も1人で軍を壊滅させられた。だが俺ら2人でやればそれぐらいできるはずだ」

「…ところで亀仙人も天津飯も前から言っている孫悟空って何者？」

「まあ…かわった奴じゃよ。何度も世界の危機を救いおった男じゃ」
亀仙人は空を見上げ、5年前のあの日の事を思い出した。

＊天下一武道会、会場＊

悟空は胸部を貫かれピッコロの猛攻の前に敗れた。と思われたこの時。

ピッコロは全員殺すと宣言し一行は絶望的な状況に直面した。

天津飯・クリリン・ヤムチャらの手にはおえないほどの強さのマジユニアことピッコロ。

だが…

「おめえの負けだ！！！！」

バキィ！！

「ぐああああ！！！！」

悟空の最後の一撃がピッコロに炸裂、この後ピッコロは仙豆で復活

するが逃走した。

以降悟空の前に姿を現さなかった。サイヤ人ラディッツが襲来するあの日まで。

…

…

…

「すごい人ね…」

「でもホレてもダメだぞ、悟空にはもう奥さんがおるからの」

「えっ！？ベ…べつにホレたわけじゃないわよ！…」

「さて…行くかの」

亀仙人と天津飯はアルビオンへ出征しようとした。しかし。

「ちょ…ちよつと待ちなさいよ！やっぱあんたたちだけじゃ不安だわ！私も行く」

「へ？」

ルイズが自ら戦地へいくと志願した。さらに志願者は増えた。

「お爺さんと若い男2人だけでアルビオンへ行くのは危険だわ、トリスティンの人じゃないけど私たちも協力させてもらってもよろしいかしら？」

なんとキュルケとタバサまできたのであった。

「お主達…」

「みんな…」

おそらくハルケギニアで最強の5人組みではないかと思われるこのメンバーでアルビオンに強襲上陸を行う。

「それではいつてきます」

天津飯がそう言うときャノピーがしまり。エンジン出力を上げ飛行機はハリアーのように離陸していった。

「大丈夫でしょうか…？」

「亀仙人さんと天津飯さんがいればなんとかなりますよ」

数十分後

「あーアルビオンよ！」

ルイズが叫んださきにはロサイスの軍港があった。

だがすでに亀仙人達の襲来を読んでいたのか空中には竜騎士20騎ほどが舞い上がり停泊中の戦艦5隻以下30隻の船の砲は上を向いていた。高角砲のつもりだろうか。

「たまたま訓練をしていたらワシらがきたことにきがついたのじゃろうか？」

「とにかく、突破します」

ゴォォ

「うわああ！！」

「な…なんて速さだ…迎え撃つ暇もなかった」

飛行機の中

「この調子でいけばあと数分で宮殿の上です」

「うむ、そろそろ上陸の準備を始めよう」

* 一方宮殿*

ヒソヒソ…

（それにしてもクロムウエル様どうかしたんでしょうか？）

ヒソヒソ…

（さあ？でもなんか様子がおかしいですね…）

クロムウエルの性格がかなり違うのはもうお分かりだろう、そうアルビオンの人々もそんなことすでに気がついていた。中には誰かに操られているとも思っていた。

「敵襲ー！！！！」

「へ？」

* 飛行機*

「よし、強行着陸じゃー！！」

飛行機は着陸した。周りにはレコン・キスタ側のアルビオン兵がわんさか並んでいた。

「ちよつと、敵のだ真ん中だわ！大丈夫なの！？」

キュルケはやばいと思った。なんせ周りには兵士、メイジも含め100人以上いるのだ。

「ワシにまかせろ」

「ちよつと亀仙人？」

「なあに、こここの所ワシずっといい所がないからのあ」

そういうと亀仙人は袖をまくりちよつと黙り込んだ。

そして…

「か・め・は・め…」

「もしかして!!」

ルイズの記憶が蘇る。どこかで見た技だ。詳しくは第四話を参照されたし。

「波~~~~!!!!!!!!」

ズドオオオオ...

まさしく、弟子、そしてその子供や孫にも使われたかめはめ波。

MAXパワーではないとはいえ戦闘力が低いものに対しては十分殺傷能力がある。

武器の残骸と人の燃えカスが残るのみになった。

「ひ...ひえええ!! 逃げろ...あいつは化け物だああ!!!!」

生き残った兵士は退却を始めた。

「普通にすごい」

久々にタバサが喋った。キュルケとルイズも目を円くして見ていた。

「ほ...本当に化け物クラスの技だわ...」

「さ、どんどんすすまんとまた援軍が来るぞ、ワシは老人じゃから体力がなくてのお」

「う...うん」

亀仙人達は宮殿内に侵入していった。

「このお!!」

パン!

火縄銃が天津飯に肩にあたるがちよつと痛かったただけで天津飯にはまったくきかない。

「どどん!!」

ビッ!

「ぐえ!!!!」

さらに...

「ほいほいさっさ!!」

バキイドカッドスッブスッ!

「ほー！」

ガンッ！

亀仙人と天津飯がすごすぎてルイズはキュルケ、タバサはただついていけなかった。

「このやるー！！」

ようやくむかつてきた奴はキュルケの炎に焼かれた。

「ぎゃあああ！！！」

「ふう、1人あがり。あの2人がすごすぎて退屈だったからちょうどよかったわ」

一方、クロムウエル達は

「なにい！？もうこの近くまできているだろ！？」

「はい！敵の進撃スピードは非常に速いです」

「くうくこのままでは…」

この時クロムウエルは最後の砦を思い出した。そして…

「先生！！タオバイバイ桃白白先生！！！」

「私を呼びましたかな？」

「先生！！出番です！！今ここに来る奴らをまとめてやっつけてください！」

「うむ、ただし相手の数によっては相当な金額になりますか？」

「かまいません！レコン・キスタが永久に栄えられれば、それに我々は貴族連合ですのぞ」

「ならば問題はなさそうですね…ようし久々にあばれちゃうぞー」

その時、クロムウエルの部屋の扉が開いた。

「！！！！桃白白！？」

亀仙人は一目見ただけでその男の名をあてた。

天津飯も驚いた。鶴仙流の彼の恩師でもあるのだ。

「…なんだ。トリステインにいる強い奴らとはお前たちの事だったのか」

ハルケギニア史上最も熱い格闘戦が始まりそうだ。

第二二話 宮殿へ（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしております。

第二三話 ゼロの亀ちゃん（前書き）

実は…最終回です…ひどい話かつ原作から完全に脱線していますが…
どうぞ。

第一三話　ゼロの亀ちゃん

なんと、レコン・キスターの強敵は桃白白だった。

「ん？天までおるではないか」

「桃白白様…」

天津飯と桃白白はしばらく睨み合った。

「…貴様…こつちにこんか？」

「！」

「いいぞこつちは、金は儲け放題だし。なにより憎き亀仙人を殺せるのだぞ？」

桃白白は天津飯を勧誘した。しかし天津飯はちよつと亀仙人のほうを見た後顔をふり怒った表情で桃白白にこう言った。

「冗談じゃありません、俺は殺しから足を払った。悪いですが俺はそつちにはいけません…」

「ほう、兄もそうだがお前を強くしたのは俺もだろ？逆らうのか？」

「なによ天津飯…あの入師匠なの？」

「…半分は」

天津飯を強くしたうちの1人が桃白白であった。

天津飯も当初は彼のような殺し屋になることを望んでいた。

「つで、あつちにいくの？」

キクルケがそうきいてたが天津飯は顔をふり桃白白のほうを睨んだ。
「…ほう、逆らうのか。ではせめて、恩師の手で殺してあげよう」

「…私は…貴方よりつよくなつてしまいました…」

「ほう…この俺よりもか？」

天津飯は顔をこくんと、そうだというように動かした。

「…小癪な野郎だ。貴様がこの俺を越えているわけがなかるう」

だが天津飯のこの時の戦闘力は桃白白120に対し180、明らかに天津飯のほうが上であつた。

「殺してやるぞ天津飯！！」

天津飯は両手を強く握り桃白白をにらみつけた。いつでも戦える状態だが。

「さて天津飯…」

「む…武天老師様？」

「ここはワシがやる」

「えっ！？しかし！！」

「まあまあ、やつとワシは。まだ決着がついてないのじゃよ」

亀仙人は彼を強いとはいっていたが勝つたとは言っていない。

決闘はしたが時には桃白白が仕事で逃げたり時にはきれいなお姉さんををみつけて亀仙人が離脱したりで決着がついていない。

「…そうだな、貴様とはまだ決着がついていないな…よしまずジジイから殺そう」

「…よいかお主ら…手を出すではないぞ…」

天津飯はともかくルイズ達には理解不能な領域である為手出しする前に不可能であつた。

「ほう、おしっこをちびつて逃げるかと思つたが。年寄りにはは立派だ」

「なにわ、お主だつて歳はジジイではないか」

お互い、体を構え…そして。

「んおおお!!!」

さきにかかつてきたのは桃白白だ。

ガッ!!

桃白白はパンチを繰り出すが亀仙人はそれを防ぐ。

続いて亀仙人も蹴りを繰り出すが桃白白はそれを防ぐ。

ガッ! パシッ! …

DBでありがちな攻撃しては防がれまた相手も攻撃しては防がれの、いわば定番の戦いが始まった。

しかしかものすごいスピードで目のいい天津飯には丸見えだが魔法が使えるって事以外は常人クラスのルイズやキュルケ、タバサにはその動きは見えなかった。

「うそ!」

「速いわ!」

「…理解不能」

「はっ!」

バキィ!

亀仙人のアゴに蹴りが命中。だが亀仙人は壁に足をつけそれで桃白白のほうにジャンプするかのように近づく。

「ほい!」

サッ!!

桃白白はジャンプをした。そして蹴ろうとしたが亀仙人は桃白白の足を握り…

「ほい!!!」

ヒューン…バゴォ!!

桃白白は瓦礫の下敷きとなった…

「さすが…2人ともかなりの強さだ…」

「なに？天津飯ってあれが見えるわけ？」

「俺の三つ目はごまかせん」

その時、瓦礫から桃白白が現れた。

「ふう…やってくれるではないかジジイ…」

「ふん、お主も丈夫なもんじゃい」

一方クロムウエルはこの場から逃げようとしていた…

（こ…これはまずい…先生が負けそうだ…にーげよっと）
その姿を目撃した天津飯は。

ヒュ…

ガッ！

「ひいいい！！」

「貴様がクロムウエルか、どこへ行く？」

「ちょ…ちよつと便所へ…」

「…逃げようたつて…無駄だあ！！！！」
ドブツ！！

天津飯はおもいきりクロムウエルの腹を殴りクロムウエルはその場に倒れこんでしまった…

白目なうえに舌を出しているので生きているかどうか微妙である。
さらに…

ガチャッ！！

「！！！！…兵士か！？」

レコン・キスタの下級兵士が数十名攻めてきた。

「な、なによ貴方達！！」

ルイズ、タバサ、キュルケは杖を向けた。

「なんだ貴様ら！？」

どうやら天津飯達にも戦う時がきたようである。

「どどん！」

「ふん！」

亀仙人はどどん波をよけ再び着地、そして…

「か・め・は・め…」

「馬鹿め、そんな速度の遅い技私はよけてしまっぞ」

「波ー！！！！！」

ボツ…

しょうもない程度しかでなく亀仙人はすぐに放つのをやめた。

だが桃白白は大技だと思いジャンプでよけた。その時亀仙人は両手を合わせバチバチいわせながら力をいれていた。

「…今じゃ！！萬国驚天掌！！！」

生涯3度目である。たしかにこれならば桃白白にも有効である。

「！！！！」

「…ぎゃあああああ！！！！！！！」

「…」

亀仙人はほっとした。これほどあっさり終わるとは思ってもしなかった。

（こっそり訓練しといてよかった）

そう思いつつ桃白白に技をあびせつつける。

「やめ！！死ぬ！！死ぬ！！！！！！！！！」

「お主はワシの世界じゃ死んだはずじゃ」

「アホ！！！！俺は生きているぞ！！！！やめろまいった本当にごめんなさい！！！！」

その時…亀仙人の肩に刃物が刺さった。

「うつ！！！！」

桃白白はボロボロだが解放され生きていた。

「大丈夫かパイパイ？」

「う…兄貴…」

「な…馬鹿鶴までおったか」

一方雑魚兵士を倒した天津飯達はその光景を見ていた。

「む…武天老師様！！！！」

「天よ、最後のチャンスじゃ。こっちにこんかい」

「…見損ないましたよ！！！！そんな不意打ちをするなんて！！！！」

「ひひひ、今だパイパイ！！」

「ふふふ…先ほどはよくもやってくれたな…だがもう負けんぞ…
ほおおお！！！！」

バキィ！！

桃白白の反撃が始まったが右肩を負傷している亀仙人にはもはや抵抗する力が残されていない。

ドカツ！ドスツ！

「はっ！」

ガッ！！！！

…

鶴仙人はどこかへ消えてしまった。

その頃亀仙人は…

「へあ…はあ…はあ…」

「痛いかな？…とどめだ！！！」

その時亀仙人は左手で桃白白にパンチした。

「ふん！！！」

ドスッ！！！！

「おおおお…ああ…うえ…」

バタ…

会心の一撃だったらしく桃白白は倒れこんでしまった。

「…ふう…」

「ちょ、ちよつとあんた大丈夫！？」

「まあ…なんとかって所じゃ」

「それにしても…一体我々や鶴仙人様達をハルケギニア入りさせた奴はだれだろうか？」

「さあ…それにあのクロムウエルという奴、正気とは思えん表情じやったの…」

その時、どこからともなく謎の声が聞こえた。

そして亀仙人達の前にカプセルを持った奴が3名出てきた。

「くうう！！…ここまでやられたら正体を明かすしかない！！！」

「なんじゃお主ら、ピラフにシュウにマイか」

「ああゝあゝ!!」

三人はぶっ倒れた。

「なんで見知らぬ老人が我々の正体を知っているんじゃない!!」

「そりゃあ悟空に聞いたからのお」

「…とにかくピラフ様、まずいですよ。あの鶴なんとかや桃なんとかを倒しアルビオンまでやっちゃった奴らですよ?」

「くうううこの世界でも征服は不可能というのかあああせつかくれコン・キスタっていう組織を作ってアホどもを利用したつてのにいい!!」

「へ?利用?」

そう、実はレコン・キスタはピラフがかげで操っていたにすぎないただの世界征服組織であった。

「それでここまで私たちを苦勞させたわけ…なんだかんだいって兵士何百人も倒すの大変だったのよ!!」

さっきまで兵士達と戦っていたルイズ（しかもその時虚無が使えなかった為肉弾戦で）は完全にお怒りモードで爆発を出せるまで怒った。

「この…この変人!!!!!!!!!!!!!!」

「爆発!!」
ピカッ!!!!

原爆のように光った。

しばらくするとピラフ一味は空高く舞い上がっていた。

「ああゝあゝここに来るまでいろいろ苦勞して強い奴もこさせ

るのに苦労したのにいいいい！！！！」

「途中まで成功していたのにいいいい！！！！！！」

「やっぱ我々つていい所で負けるんですね…」

キラーン

消えた。

ルイズの虚無で事は解決。亀仙人はこう思った。

（ルイズ…ある意味悟空より強いかもしれん……怖さ的な意味での…）

なにはともあれ、これでアルビオンとの戦争は終了。その後亀仙人はアンリエッタからシュヴァリエの称号をもらった。使い魔として今もルイズの所で生活しその後もその強さを生かし様々な困難を才人とは違い余裕で乗り越えたという。

天津飯は修行に出ると言い残し学院を去るがシエスタがずっとおいかけてくるのであら迷惑だという。

コルベールは無駄に身につけた知識と技術で新兵器（空飛ぶ蛇くん）を開発中との事。

アンリエッタはウェールズと結婚したらしい。またアルビオン王国は復活しレコン・キスタ側兵士の多くもレコン・キスタの正体をする王室側に寝返った。

ただし今もゲリラ兵に軍は悩まされているという。

1年後地球では…

「おちこぼれだつてエリートを超えることがあつかもよ？」

…悟空とベジータの激戦は繰り広げられた。また亀仙人は不在ながらこの世界には天津飯も存在しセル足止めにも成功している。

ハルケギニアに永住する事になった亀仙人は年齢的に結婚はしていないがルイズのよきお爺さんの役として関係は良好であった。

数年後、タバサに頼まれた修行中の天津飯がガリアをぶっ通しガリア王ジョゼフを退位させシャルロット姫ことタバサが新国王となりガリアは平和になったらしい。

まあいろいろあつて500年後…

今まで文明が停滞していたハルケギニアだがこの頃にもなればコルベールの活躍がきっかけですっかり近代化していた。だがこの頃になつてもトリステインでは亀仙人、天津飯、ルイズは英雄とされた。タバサやキュルケも祖国で英雄となつたらしい。

ピラフ一味のせいでこんなになつたが…めでたしめでたし。

第一三話 ゼロの亀ちゃん（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0230i/>

ゼロの亀ちゃん

2010年10月21日02時23分発行